

第 47 回 \* 2006 年 7 月 2 日

パネラー：三木亘

リプライ講演：いいだもも

地中海世界のミノア・ミュケーナイ文明とは何であったのか？

一線文字 B 文書の発見によるクレタ島文化とギリシア文化の連続化

(それによる人類文明の地中海世界史的連続性)

はじめに

猪野修治 それでは、いいだももさんの「連続懇談会」第 3 回目を始めたいと思います。この懇談会を開くにあたって、その間この本と格闘し、頭から離れないでおりましたが、早いもので、本日で 3 回目になりました。事務局から 2、3 連絡をさせていただきます。

まず、5 月 7 日に第 1 回目の会合がありましたが、その次の日に、入江曜子先生が『東京新聞』にお書きになった記事がございますので、ご紹介したいと思います。この前、江ノ島の「岩本楼」で、いいださんの「出版を祝う会」がおこなわれたときに、司会をされた入江先生ですけれども、わたしは（掲載日の）翌日にそれを送っていただいて読み、たいへん感動いたしました。「『国を愛する』ということ—教育基本法改正をめぐる—」という文章ですが、論点が明快です。今日、入江先生ご自身、コピーをお持ちいただき、数部ご用意しております。関心のある方はご覧いただきたいと思います。足りない場合は、恐れ入りますがコピーしてください。

それから、6 月 24 日（土曜日）に「History of Chemistry」という化学史の学会（和光大学）がありまして、わたしはそこに終日出ておりましたが、水俣病 40 年という歴史的節目に当たって、アカデミズムの化学史学会が開催したシンポジウムとしては、かなり意義深いものがあったと思いました。水俣病の水銀問題で化学的な発見をされた原田正純先生がおいでになられて講演をされましたが、その中で、わたしが特に印象的だったのは、原田先生が「学問のために水俣の問題を扱ってきたのではない」と明確に述べられたことでした。目の前に患者がいて、この事態をなんとかしなければいけないということで闘ってきた。それは、アカデミズムから見れば研究だといわれるかもしれませんが、そんなちんけな思考で、この問題に当たってきたわけじゃないんだ、ということを力説されました。非常に感銘したしいです。

次に、渋谷にある日仏会館では、フランスと日本の「文化交流」を精力的にやっておりますが、そこで、1968~69 年問題の「シンポジウム」が立て続けにあり、わたしも出席しました。どちらも世界規模の思想的な大事件があった年ですが、その問題を日本とフランスの思想家たちが比較研究し、なおかつ 21 世紀のアメリカ帝国主義下におけるグローバリゼーションの中で、日本の学問状況、思想状況をどう位置づけるべきなのかについて、真摯な議論が交わされました。たいへんに興味深いものでありました。

しかるに、マスコミは団塊の世代は（定年退職後に）どうするのかということばかりを報道しています。わたしは 1945 年 7 月 7 日生まれで、まもなく 61 歳になりますけれども、一般的な言い方をすれば、団塊世代ではないんでしょうね。堺屋太一さんがつけたこの名前を使うのは嫌なんですけれども、

わたしより2つ下の47年生まれが団塊の世代で、来年60歳で定年を迎えて、かれらがこれからどういう人生を歩んでいくのかということを考えるときに、この日仏のシンポジウムで語られたことをどういう方向にもっていくのか、もっていけるのか、あるいは、わたしたちの世代がどういう生き方を選択していくのかが、非常に大事なことだと思っています。

司会者の特権で(話が長くなり)恐縮ですが、いま労働運動がメチャクチャになっているということ、それから年間3万人という自殺者の発生、学校教育・親子関係の崩壊、凄惨な殺人事件の問題等々を考えますと、〈68年〉を闘ってきたわたしたちの世代が、これからどういうことを若者たちに示していくのか、どういう生き方をしていくのかということが、非常に問われているのではないかと思います。60年代後半、東京大学・日本大学をはじめとしたあのような闘いののちに何がきたかということです。

わたしたちの世代は子どもたちがだめになったと言われてはいますが、このシンポジウムに出てあらためて、この懇話会も含めて、わたしたちがこれからどういう社会的な発言をしていくかが問われていると思いました。いいださんも講演でおっしゃっていますが、「独我論」ではなくて、他者との関係の中で主体的にどういうふうに見ていくのかということが本当に必要だと感じます。

ところで、いいださんが関係している『未来』編集部の恵浩司さんが、わざわざお出かけくださっているので、一言ピーアールをお願いいたします。では、どうぞご発言ください。

恵浩司 今日、こちらに新聞を置かせていただいておりますので、まだご覧になっておられない方はあとで見ていただきたいのです。猪野さんが、いまおっしゃったような、新しい社会運動には、ラテンアメリカを先頭とするキューバのゲバラの遺志を継ぐ運動が巨大なイデオロギーとしてあるんですが、そういったことやその背景について書かれています。(わたしたちの会の)ホームページの掲示板にも書いたんですが、労働運動もそういった新しい社会運動の系譜として考えておまして、この会自体も相模原の戦車闘争の流れの中にあると思っていますが、このたび、わたしたちは、関生の労働者運動について書いた『労働運動再生の地鳴りがきこえる』という本を出しました。この労働運動は韓国の労働運動とも連携しておまして、そういう新しい社会運動という意識でもってやっております。その出版記念会と集会を7月8日に教育会館でおこないます。

この新しい思想をもった労働理論を実践的な意味合いで追求していきたいと思っています。この間の耐震偽装問題に対比させるとよくわかりますが、たとえばシャブコンというのがありますが、生コンをつくる時に水で薄めると量が増えて、より安価で販売できるんです。しかし、シャブコンを生産すれば、逆に労働者自身の生活が貧困化して困るわけですから、それに反対する。シャブコンを生産させないという意識をもってやるということです。水俣の運動にしてもそうですが、そういう企業犯罪に対して労働者自身が抵抗できない、あるいは、個々人の動きはあっても労働組合として異議申し立てできないという歴史がずっとあったんですが、関生の運動はそれを告発していくという歴史的意義のあることをやっています。ぜひ皆さんにもこの出版記念シンポジウムに参加していただいて、そのところをご確認いただければと思います。

猪野 どうもありがとうございました。『未来』の編集部には感謝を申し上げます。いつも懇話会の案

内をタイムリーに掲載していただきましてありがとうございます。

では、いいださんの連続懇談会の本日のメインテーマ「地中海世界のミノア・ミュケーナイ文明とは何であったのか」に入ります。パネラーの三木亘さんをご紹介します。今日は「世界史の中におけるギリシア幻想」というタイトルで、いいださんのこの大著も含めたかたちで1時間ほどお話ししていただきたいと思います。

三木さんは1925年のお生まれで、東京大学西洋史学科卒業、中東歴史生態学がご専門だということです。慶應大学特選塾員でもあられ、著書には『これからの世界史2 世界史の第二ラウンドは可能か—イスラム世界の視点から』（平凡社、1998年）、『イスラームとは何か—「世界史」の視点から』（共編著、別冊『環』4、藤原書店、2002年）、『江戸時代とオスマン帝国時代—農村の比較研究』、『中東の生薬と香料薬種商』（英文、6分冊）などがございます。これから皆さんに回しますのでご覧ください。わたしは最初の2冊を買い求めて一気に読ませていただきました。

話が長くなってすみませんが、前回のいいださんの話ではありませんが、いいだ本はいずれ社会の状況が変わってきたら、1000部どころじゃない、何部売れるかわからないとおっしゃいましたが、まさにそのとおりで、そのためにはささやかな努力をしないといけないと思うんですが、同じように三木さんの本も、もっと皆さんに読んでほしいと思います。イスラームの話題がこのところマスコミを賑わせておりますが、わたしは日本のメディアの報道でしかイスラームのことは知りませんが、三木さんのこの『世界史の第二ラウンドは可能か』は、現地を歩かれながらイスラームの人々と実際におつきあいをされておられます。その中から発言された講演録であり、非常に読みやすかったことを申し上げます。

それから、わたしは、いまはフリーの立場ですが、かつて物理の教員を34年ほどやっておりましたが、この本の最初に、こう書かれております、「東京都立科学高校、都立大学付属高校、東京外語大学、慶應大学、その他出校した諸大学、朝日、NHK その他のカルチャーセンターなどで、わたしの講義を面白がり、あるいは反発し、あるいは総攻撃、時にドキリとする質問をしてくれた学生・生徒諸君に感謝をこめて」。つまり、そういう諸君に本を捧げるということを書いておられまして、非常にわたしは親しみをもちました。おそらく何十年も、いろんな学生たちを相手にしてこられた方なんだなと思いました。

別冊『環』のほうも、ひととおり目を通しましたが、わたしには細かすぎてわかりません。今日はそのへんもわかりやすくお話しいただきたいと思っております。

いろいろご多忙なところを、わたしのお願いをお引き受けいただきまして、まことにありがとうございます。では三木さん、よろしく願いいたします。

## 1 学問は遊び

ご紹介いただきました三木です。猪野さんの紹介に、ちょっと付け加えますと、わたしはいいださんと同じ齢で、大日本帝国が愚かな戦争に負けつつあるころ、旧制第一高等学校、いまの東京大学駒場校に、ももさんと同じ年に入っております。ももさんはそのころから筆が立っております、『向稜時報』という文芸部の出版物にどんどん書かれていました。わたしは理科だったものですから、一高時代には直接お話ししたことはなかったんですが、それからはるか半世紀以上たって、偶然の縁でいいださんがやっておられる会に招かれて、そのおかげでいまご紹介いただいた本を平凡社から出していただくことができました。奇しき縁だと思っております。

わたしは学問というのは遊びだと思っています。男と女の遊びと並ぶ世界最古の遊びで、どちらも坊主さんが関係しているというのが面白いですが。

わたしはこの20年くらい、京都の国際日本文化研究センター、梅原猛さんが中曾根康弘さんを騙してつくったあの共同利用研究所で、共同プロジェクトなるものを4つほどハシゴしております、ほぼ隔月に京都に通っていましたが、この3月でそれが終わりにになりました。それをつくづく思ったんですが、学問なんていうのも最初はたいい坊主さんが始めるもので、坊主さんはまた昔から今にいたるまで遊ぶのがたいへん上手で、金を集めるのも上手です。いまでもあの祇園を維持しているのは京都の坊主さんですし、世界最古の大学はたぶん比叡山と高野山大学で、エジプトのカイロのズジハル大学よりもうひとつ古くて、ヨーロッパのオックスフォードやパリ大学よりもはるかに古い。そういう大学が日本にあたりする。学問などをやる人間は金を使って蕩尽するのが商売ですから、サル学を始めた今西錦司さんなんかは、生まれ育った西陣の機屋を1軒つぶしてしまいました。遊ぶなら人が思いつかないような面白い遊びをやったほうが得ですね。

## 2 終焉しつつあるアメリカ文明

今日、コピーを持ってくるのを忘れたんですが、平凡社のPR誌で『月刊百科』というのがありまして、それに自分の本（『世界史の第二ラウンドは可能か』）の広告を書けというので、「人類滅亡観光協会」のことを2頁書きました。

都立大学付属高校の教師をやっていたときですから、1960年代のことですが、あそこはいわゆる受験校で、1月で授業をやめてしまつてあとは自由聴講になるんです。そのときふと思いついて言ったんですが、「人類滅亡観光協会」と「日本国解散準備会」と「東京都破壊計画委員会」の3つを立ち上げるから、入りたいやつは入れと。この会は会費はとらない、役員もつくらない、趣旨に賛同して活動すれば、それで会員だということで。言いだした以上、わたしも会員なんですが、平凡社の本を書いたころに、にわかに自分がそういう会の会員だったことを思いだしたんです。

会員のやるべきことは何かというと、客観的に見て人類滅亡の可能性が無数にあるのは事実です。それで、そのうちどれが当たるかと考えて、いちばん早く実現するのがあったら、うまくすれば人類滅亡

という、人類史上 1 回しかない事件を観光することができる。こんな楽しいことはないじゃないかと。そういうバクチをやったりすることも会員の仕事です。世界中を見渡して、人類滅亡にいちばん貢献しそうなのはアメリカ合衆国です。世界を汚す、海水面が上がって北極も南極も溶けつつある、有害無用の人殺し戦争をはじめ、社会治安が米国よりはるかによかったイラクを血みどろの国に開発した。そういうのにアメリカ合衆国がいちばん貢献している。次いで日本だと思いますが。

ここ 10 年くらいで実際に核爆弾のスイッチを押しそうなのは、息子ブッシュだと思いますね。暗愚（暗くておろか）、愚昧（愚かで暗い）という権力者に対する形容詞があることは知っていたんですが、まさかそれに当たるような人間が実際に出てきて、テレビで顔をさらしたりするという楽しいことに出会えるとは、夢にも思わなかった。あの人は本当に愚かだと思いますね。9.11 の直後、「復讐だ」みたいなことをつい口走ってしまって。政治家というのは自分の本音は言うもんじゃないんです。自分が何か言ったりしたりすることで人々がどう反応をするかを見定めてやるのが政治家だと思うんですが、つい本音を言ってしまった。これまさに愚昧か暗愚、ほんとに愚かな人だと思います。

アメリカはイラクへ軍隊を出して、そして結局はイラクだけじゃなくてアラブ全体から、近ごろではヨーロッパでも批判されています。数年前にも、息子ブッシュがドイツへ行ったときに、国会で喋ろうとしたら、国会議員の中に横断幕を広げて「ヤンキー・ゴー・ホーム」とやったりするのがいたり。それから、いま世界でいちばん危険なのはアメリカ合衆国だということを、ヨーロッパの人たちが公然と言うようになってきている。フランスの人口学研究所の所長をやっているエマニエル・トッドさんは、アメリカ帝国はもうお終いだと言っています。わたしは 98 年にそれと同じことを言っていますので、私のほうがちょっと早いんですが。

この『世界史の第二ラウンドは可能か』の終わりのほうに書いたんですが、シカゴから始まって世界中に広まったスカイスクレーパー（高層ビル）は、見渡したところ墓標だと。近代西洋文明とその破産管財人であるアメリカ文明の滅亡にふさわしいお墓です。今日お配りしたプリントにも書いてありますが、数年前に新宿住友ビルの朝日カルチャーセンターに 3 ラウンドくらい通ったことがあるんです。そこでつくづく感じたんですが、ようまあこんなひどいところで人間が働いたり暮らしたりしているなど。気持ちのいいことは全然ないですね。エアコンなどの人工機器というものは人を快適にさせる能力はもっていません。かつて毛利衛さんという方が宇宙飛行から戻ってきて、地球がどう見えたかと訊かれたときに、東京の上にはきのご雲がかかっていたと言いました。つまり、東京の空気は全体が汚染されているわけです。エアコンなんてものは、ただそれを掻き回しているだけの話で、しかも冷やしすぎたり暖めすぎたりしている。都市は臭くて汚い無機質なものになってしまって、無機質な環境というのは、わたしのように年をとると体にこたえますね。世界中に、そういう人間が住むに耐えうるところじゃない高層ビルをつくってしまった。1930 年代にフランスから出て日本にもはやった言葉を使えば、デラシネ（根こぎにされた人）収容所ですね。これはまさにお墓にふさわしいと思っています。

### 3 現代文明はいままさに更年期

先ほど、歴史生態学が専門とご紹介していただきましたが、これはわたしが勝手につくった学問です。学問というのは要するに遊びですから、好奇心のおもむくままにやればいいんで、これまでの学問の中にそれに当たるものがなければ、つくってしまえばいいわけです。それで、この平凡社の本を書くもう

10年くらい前ですが、自分がやっていることは何学だろう、どういうレッテルにしようかと考えたんですね。わたしは歴史畑を出たんですが、人類学、民俗学、地理学、生物学、いろんなものに興味をもって引っかき回して、それ全部を合わせたみたいなことを書いたり言ったりしている。それで「歴史生態学」としたんです。

生態というのは、生きている姿です。この世に現実存在するのは、人間と自然しかありません。そしてもうちょっと言えば、それは動態としてあるんで、これは仏教の考え方と同じで、因縁なんていうのがそうですが、人と人とのつきあい、人と自然とのつきあいのことです。つきあいというのは、動いている姿としてあり、実際に存在するのはそれだけなんです。そして、人間も自然の一部でしかない。これがわたしの歴史生態学の公理、定義です。つきあい方にはいろいろあって、第二次世界大戦後のフランスのアラブ研究の大御所の一人、ジャック・ベルクさんがうまいことを言っております。ある時代、ある地域における人間観と社会観とは一対一の対応関係をもっていると。ジャック・ベルクさんはアラブ研究でいろいろ面白い仕事をやってこられた方ですが、息子のオーギュスト・ベルクさんは日本研究者で、いま京都日文研の客員か何かをしておられます。

それから、お配りしたプリントのどこかに、イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』のことを書いていますが、これは岩波文庫で4冊本の翻訳が出ていますので、ぜひお読みいただくといいと思います。イブン・ハルドゥーンは14世紀のチュニジアの生まれ育ちで、晩年はカイロで過ごした人ですが、たとえばイギリスの人類学者で哲学者でもあるアーネスト・ゲルナーさんは、イブン・ハルドゥーンの考え方は現代世界の現実に対しても通用すると言っています。それはある意味での世界史の法則であり、これも生物モデルです。

これもプリントのどこかに書いていると思いますが、初代は若いときに青雲の志を抱いて、笈を負うて東都に上り、刻苦勉励して働いて身上を築く。二代目は可もなく不可もなく保守、三代目になるとお学問、お文学、男女の遊びその他よからぬことで遊んで蕩尽する。四代目くらいになると、売り家と唐様で書くと。いま近代西洋文明の末期の姿であるアメリカ文明は、その保護国あるいは属国である日本の住民としては悲しいことだと思うんですが、まさに三代目か四代目になりつつあるわけです（日本はアメリカの保護国であるというのは、エマニエル・トッドさんが『帝国以後』（藤原書店）という本で言っていることです）。そういうふうには、生物モデルで社会を見ていく。

70年代から80年代にかけて、わたしが東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所にいたときに、いわゆる海外調査をやりました。モロッコから中東を経てインド、タイにいたるまで十数カ国を6回くらいにわたって学術調査しました。1回出かけると半年くらいかかります。その研究対象が香料薬種商というもので、日本でも10年以上前からアロマセラピーの類がはやっていますが、香料薬種はそれのもとになるものです。と同時にそれは生薬でもあって、伝統的なアラブ医学の薬にもなります。漢方の薬と同じで動植物などの天然物を処方します。アラブ医学は、インドのアーユルヴェーダ、中国医学の漢方などと並ぶ、世界三大伝統医学のひとつです。

それで、日本でいうところの薬種商とつきあって、かれらの商っている生薬や香料のサンプルを集めて、それが何に効くのか、どういう病気に対してどういう処方をするのかなど、いろいろ聞き取ったんです。京都大学の薬学部でわたしの研究のパートナーをやってくれた人がいて、集めてきたサンプルがいまの生物学でいうとどういうものであるか、つまり同定（アイデンティファイケーション）をやってくれて、6冊くらいモノグラフ（研究書）を出したりしました。

このときに医学や薬学の人たちとつきあったり、自分でもアラブ医学を勉強したりしました。年をとってくると自分の体という他人がなかなか言うことを聞いてくれなくなりまして、それをつくづくわかったんですが、人間という生き物は 25 歳くらいが身体的には頂点なんだそうで、あとはダウン・ヒル・オンリー (down hill only)、下り方が階段を下りるみたいなんですね。

経験的に思うことですが、男女を問わず更年期とか厄とかいうものは、5 年ないし 10 年くらいごとにめぐってくるものですね。5 年か 10 年は自分の体なんか気にしないでやっていける。それがどこか具合が悪くなると、あちこちおかしくなる。歯が悪くなる、冷えるとか故障が多くなって、そこをうまく突破できないと、そこで逝ってしまったりする。でも、そこで一段落つくことができると、また 5 年か 10 年くらい平らなところに出ることができて、体のことを気にしないでやっていける。これは、わたしが 25 歳くらいからの経験から申し上げることです。

人間の社会も、イブン・ハルドゥーンのように生物モデルでとらえられます。しょせん人間のやっていることです。そうすると、文明とか帝国とかが後退していくときというのは、やはり更年期とか厄ではないのかと。集団的な更年期で、そこをうまく突破できないと死んでしまう。事実、滅びて本当に消え去ってしまった文明もあります。

わたしは、第二次世界大戦以後のアメリカを頂点とした世界文明は、いま更年期にさしかかっているのではないかと実感しています。暗愚、愚昧としかいいようのない息子ブッシュのような人間が世界最大の国の大統領をやっていること自体が、まさに更年期にさしかかっている証拠です。

それから、芝居のパフォーマンスとしては少しは上手だったかもしれませんが、知恵はゼロの小泉純一郎です。わたしは横浜の金沢文庫に住んでいるんですが、横須賀は隣なんで、地元で飲んでいまして、横須賀のニュースもいろいろ入ってくる。小泉純一郎がどういう育ちをしたか、ろくでもないやつと遊んでばかりいたやつだとかということを聞いたりする。

その報いといいますか、わたしがこのごろ思うのは、日本列島というのは生態学的にあまりにも条件がよすぎるので、それに甘えて、逆にわれわれ (日本列島人) には世界の中で生きていく知恵の何かがあるものすごく欠けている面があるのではないかとことです。20~30 年前から日本の農山漁村では跡継ぎがいない。ところが、人間の社会というのは、一次産業というものがなければ存在していくことができない。その根っこが日本中でどんどん壊されつつある。……すみません、これでやっとギリシアにたどりつきました (笑)。

#### 4 緯度 30 度から見えてくる世界

アテネ・オリンピック (2002 年) のときに、テレビでよくギリシアの街の人々の様子を流していました。それで、飲み屋なんかで飲んでいる人たちに、あんた元気かと聞くと、8、9 割の人が元気だと答える。ところが、日本でそういう質問をすると、半分以上の人がどこか悪いと答える。ギリシアのおじさん、おばさんたちに、何でそんなに元気なんだと聞いたところ、われわれは野菜や果物をたっぷり食べるからだと言うんです。これは事実ですね。アラブやトルコ、イランなど、中東の人たちもそうです。

ついでに言うと、ギリシアとトルコというのは、いま国家としてはケンカばかりしていますが、人間そのものは同じです。同じような顔立ち、体つきをしていて、料理もほとんど同じ。ところが、同じよ

うなコーヒーを飲んでいるのに、断固としてギリシアはギリシア・コーヒー、トルコはトルコ・コーヒーと言う。同じような干しぶどうの焼酎を、ギリシアではウゾー、トルコではラクイと言います。ついでに言えば、シリアではアラク、カイロではズビーブ、パリに行けばベルノで、同じものが場所によって名前が違うだけの話ですが、これはまさにいいださんが書かれている地中海世界なんです。地中海世界は同時に中東とつながっておりまして、だいたい似たり寄ったりです。

差し上げたプリントの最後の地図をご覧ください。横に 40 度、30 度、0 度と緯度を入れてあるのは、30 度を中心としたあたりのベルト地帯、東アジアの南のほうからインド、中東、地中海、大西洋を飛び越えてカリブ海の両側までのベルト地帯が、人間という生き物が住むのにいちばん適したところなんです。したがって、そのあたりで暮らしている人々は遊ぶのが好きです。そこから離れれば離れるほどよくないところになる。近代ヨーロッパ文明なるものは 1800 年ごろから展開していきますが、その中心はどなたもご存じのようにイギリス、フランス、ドイツですよ。ロンドン、パリ、ベルリンが、日本でいうとどのへんか、考えたことはありますか？ 日本には入りません。〈樺太〉、〈サハリン〉あたりです。SF 作家の小松左京さんがスウェーデンのウプサラで冬を過ごしたことがあって、こんなひどいところによく人が住めるなと思ったそうですが、冬はほとんど薄暗くて、日が照ることがまずない。

40 度から上、つまりアルプス・ピレネー以北の近代ヨーロッパをつくりあげた地域の人々というのは、夏に裸になるのが好きですね。やたらに裸になります。バルト海沿岸なんかでは、短い夏の間じっくり紫外線をとりこんでおかないと冬がちゃんと過ごせないといって、みんな裸になってしまう。そこで、バルト海を通る船からヌードを楽しむのにカール・ツァイスのレンズが発達したという話があります。本当がどうか知りませんが。

このへんの人たちは、金髪紅毛碧眼、ブロンドで青い目、色が白いです。これは色素が足りないのであって、生物学的には弱いんですね。植物も動物も緯度の低いところから高いところへはけっこう移転ができます。稲のような熱帯ないし亜熱帯の植物でも、サハリン、〈樺太〉、中国では黒竜江省、ずいぶん緯度の高いところでも大丈夫です。夏に日照りがあって水がたっぷりあれば、稲はつくれます。ところが、緯度の高いところから低いところへ動植物を移すということは、ほとんど不可能に近い。人間もそうなんです。

帝国主義の報いで、いまブリテン諸島には、カリブ海沿岸やインド・パキスタンなどもと植民地からやってきた褐色の人々が 200~300 万くらい永住しています。かれらのような色素に富んだ南の人々は、北の果てに行っても体が悪くなることはありません。ところが、プリントにも書きましたが、イギリスはインドを 2 世紀にわたって征服支配しましたが、植民地官僚は夏になると、みなダーズリンかシムラに避暑に行く。海拔 2300~2400 メートルのヒマラヤの中腹に上がらないと、死亡率がやたらに高くなる。オーストラリアでも、クイーンズランドを上ってシドニーからもっと北のダーウィンのほうに行くと、白人にはやたらに皮膚癌が多い。北のほうの人たちというのは、そういう点で広い地球を狭くしか生きていけない、たいへん気の毒な人たちです。

一高に入ったとき、山岳部に入るか水泳部に入るか迷って、山岳部に入りましたが、わたしは 4 つのときから海に入っていますから、夏にこんがり焼くと、冬をたいへん快適に過ごせることを知っています。その昔、わたしは医学も生物学もある程度かじりましたから、これは間違いございません。うんと紫外線を浴びて体に色素をつくっておくと、それが次の紫外線除けになる。だから、色が白いほど危険なんです。



## 5 置き薬からわかる東西日本の違い

中東の香料薬種商の調査をやるのに関連して、日本のそれと同じようなこと、つまり置き薬、昔は売薬さんといいましたが、その調査をやってみました。富山県がいちばん有名で、あと滋賀、奈良、佐賀の4県が置き薬の中心ですが、これはどうも昔の山岳仏教修験者、山伏と関連があるんですね。富山であれば、立山の登り口の岩倉（イワクラ）寺や芦倉（アシクラ）寺など、昔は山登りのガイドをいっぱい出したところですが、みんな修験者、山伏の住んでいる村です。伊賀、甲賀（こうが）は忍者の産地で、飯道（ハンドウ）山だったか、あの辺にも修験道の山があるわけです。ギリシアにもアトス山なんていう、ギリシア正教の修験にあたるような山があります。

鎌倉・室町・戦国くらいの時代ですが、修験者は全国を歩き回って、行った先々の村に経帷子を置いていくんです。次にそこに行ったときに、誰かが亡くなってそれを使っているとお布施がもらえる。そういう慣行上に乗っかって薬を置いていった。そして、次に行ったときに使った分だけ払っていただく。修験道からそういう面白い商業慣行が生まれたわけです。

滋賀県（甲賀）の野口信満さんという置き薬を長年やってこられた方の話によると、お得意に飛び地があるんです。500軒か1000軒見当を単位に掛け場（薬を置いて回るところ）というのがあって、ここ30~40年は団地がひとつの掛け場になったそうですが、そこを1年おきくらいに回って、使った分だけ代金をいただいて補充する。その掛け場の台帳も商品化しています。野口さんの掛け場は、尾道から今治にかけての瀬戸内海の島々と、濃尾平野のど真ん中の一宮あたりという具合にあちこち飛んでいるんですが、どうしてですかと聞くと、リスクの分散だと言うんです。たとえば、江戸時代に天明と天保に大飢饉がありました、これは圧倒的に東日本で起きたものです。西日本は大丈夫だった。さつまいもが早くから広まっていたからです。そういうときは、名古屋あたりは飢饉で使った薬の代金も集めることができなかつたけれども、四国のほうは大丈夫だった。そういうときのリスクを分散させるために飛び地を持っている。

その話をお聞きしたときに、野口さんが面白いことを言っていました。膏薬なんですが、関西の人はトクホンだと効かなくて、サロンパスじゃないとだめだと言うんです。ところが、東日本の人はサロンパスだとかぶれたりするので、トクホンじゃないとだめだと。サロンパスの本社は田代（佐賀県の鳥栖）で九州から出ていますが、トクホンは埼玉から出ているんですね。もうおわかりだと思いますが、西と東で皮膚が違うわけです。網野善彦さんと宮本常一さんの共著で『日本の東西を語る』という本がありますが、東西日本の通婚率が現在でもせいぜい7、8パーセントだというデータを見て、驚きました。おそらく、糸魚川と天竜川の大構造線あたりを境にして、東日本と西日本では人種も違うのかもしれない。言葉も違いますし。これはかなり質的な違いです。日本列島は小さな島ですけれども、けっこうそういう違いがあるわけですね。網野さんは、そういうところから、日本という国はずいぶん後になってできたんだと、それまで日本列島にはいろんな国があったんだということを、晩年になるほど言いつづけていましたが、そのとおりだと思います。

## 6 人間の言葉はバイリンガルが基本

わたしは、人間の言葉というのはバイリンガルが普通だと思います。少なくとも2つ。ひとつは母語です。誰に教えられたわけでもなく、生まれて、母親に育てられていく過程の中でおのずから喋るよう

になる。これまさしく母語、母の言葉です。これは場所によって違う。もうひとつは、何らかのレベルの共通語です。標準語とは違います。標準語というのは誰か権力者がこれを標準語にしろと押しつけるものですが、共通語というのは地域の人と交流したりするときに育った母語以上に役に立つものです。だから、共通語にはもっと広いレベルの共通語もあったりするかもしれない。すると、バイリンガルではなくトリリンガル、クワトリリンガルとなったりすることもある。

いつだったか中東あたりを歩いていて、ベイルートからタラーブルス（トリポリ）に行くのにセルビス（乗り合いタクシー）に乗ったら、ぎゅうぎゅう詰めで、隣の男と顔がぶつかりそうになって、その人にどこの人間だと聞いたら、アルメニア人でタラーブルスの港でムカーウィル（請負業者）をやっていると云うんです。いろいろ話していて、いくつくらい言葉を話せるのかと聞くと、ちょっと考えて、8つくらい喋れると。それで喋ってもらったんですが、見事でした。アルメニア語、クルド語、シリアですからアラビア語のシリア弁、それからロシア語、フランス語、ギリシア語……。そのときにつくづく思ったんですが、言葉というのは音楽ですね。かれに違う言葉で同じ意味のことを喋ってもらったんですが、すると表情ばかりか身振りまで違う。

小泉文夫さんという、世界中で音のフィールドワークをしまくった方がおります。青土社から10冊くらいフィールドワークの結果が出ていますが、すばらしくいい文章で、何の予備知識のない方でもすらすら読めてしまいます。小泉さんはわたしと同年輩ですが、還暦のころ亡くなりました。その小泉さんが、生まれつき喋っている言葉、つまり母語は、音楽だと言っています。童歌（わらべうた）というのが世界中どこにでもあって、どんな芸術的な音楽であろうと、ある言語に属する人がつくった音楽は、必ずその言語の童歌の音楽の上に乗っかっているというんです。

わたしは中東からインドあたりまでを歩いてみて、そのとおりだと思いました。サンスクリットをもとにしたインドの言葉と、アラビア語、ペルシア語、トルコ語と、それから欧米人の言葉にも出会いますが、みんな性格が違うし、音楽も違います。日常話している会話自体が音楽ですが、その上に立って出てくる音楽はというと、インドは映画音楽が有名ですね（世界でいちばんたくさん映画を作っているのはインドです）。それからアラブ音楽。トルコ語とペルシア語の音楽にもアラブ音楽の理論が使われているんですが、小泉さん自身はこの3つをはっきり区別していて、アラビア語の上に乗った音楽、ペルシア語の上に乗った音楽、トルコ語の上に乗った音楽と分けています。

## 7 ギリシアは西洋ではない

またギリシアがどこかへ行ってしまいましたので、ギリシアに話をもどします。ギリシアとトルコは喧嘩ばかりしているけれど、じつは同じなんだという話でしたが、トルコの人類学者で、最後は大統領顧問か何かをやって引退した友人がおりまして、このあいだ家族連れで日本にやってきました。チャーさんというすてきな地中海美人の娘さんも一緒です。それで、九州に行くと言うので、わたしも片言のトルコ語でトルコを歩いたんだから、あんたも日本を片言の日本語で歩きなさい、と言って歩かせましたら、とてもよかったと言っていました。行った先々で何人と言われたかと聞くと、ときにはアメリカ人と言われたけれど、平均して多かったのはフランス人かスペイン人だそうです。やはり地中海なんですね。いろんなのが混じっている。

イスタンブールから南の地中海に下ったことがあるんですが、感じとしては、イスタンブールあたり

はスラブくさい顔立ちや皮膚がかなりあって、トロス山脈を越えるとアラブくさくなる。連続して変化します。シリアとかエジプトあたりだと、酒を売っている店はだいたいギリシア人がやっていて、顔つきも雰囲気も違うのでわかります。

先ほど、ギリシア人は野菜や果物をもりもり食べているから元気だと言いましたが、ギリシアにしても中東にしても、肉食度は非常に低いです。中東はもともと遊牧の世界、ギリシアももとを質せば同じなので、わたしは肉食度は高いかと思っていたんですが、違うんですね。伝統的な牧畜や遊牧での毎年の家畜の自然増というのは高が知れたものです。ですから、毎日肉を食べるなんてことは伝統的な牧畜では不可能です。それが、アメリカでもヨーロッパでも、まねして日本でも（頻度ははるかに低いです）、やたらに肉を食べるといのは、家畜を人工的な機械にしているわけです。牧畜工業です。家畜にやたらに飼料を食わせて、やたらに子供を産ませて、肉の製造機械に変換してしまったんです。

伝統的な牧畜がおこなわれている社会で食べる肉の量なんて微々たるものです。では、脂肪やタンパク質をどうやって摂るかというと、乳類からです。チーズ、バター、ヨーグルトなどの乳製品をたくさん摂ります。伝統的な牧畜では家畜の乳を盗むことはやりますが、肉まで工業化することはないわけです。逆に、ギリシア料理には魚料理が非常に多いですし、トルコ料理も同じです。

トルコ人の友人の娘チャーさんは、たぶん自分たちはもとはギリシア人だと言っていました、トルコの海岸沿いに住んでいる人たちにはギリシア系が多い。イスタンブールのあるボスフォラス・ダーダネルス海峡は、黒海の水位が地中海より高いので海水がいつも川のように流れているんですが、そういうところは魚が湧きやすいので非常にいい漁場なんです。そのあたりで魚を獲っている連中は、遑ればギリシア系というのが圧倒的に多い。また、かれらはバイリングル、トリリングル、クワトリリングルがごく普通です。先ほども言いましたように、言葉によって表情や身振りまで違いますから、人間のあり方というのは言葉によって違ってくるといえます。もちろんそれは書かれた言葉ではなくて、話されている言葉です。

わたしは、横浜で「スパルタ」というギリシア・レストランを経営していたギリシア人と、30年くらいつきあってきました。レストランはもとの板東橋のあたり、伊勢佐木町の奥のほうの黄金町に近い、ちょっとやばいところにありました。かれはスパルタ出身で船乗りだったんですが、横浜が気に入って住み着いたんです。海の民には地域に拠る人種民族とは違ったレベルの問題があるようです。つまり船乗りというのは、定年になると、それまで渡り歩いたなかで気に入った港町に住み着いてしまうという習性があるようです。その点では横浜よりも神戸のほうがはるかに多様で、いろんな種類の人々が住んでいて、インドのジャイナ教の寺院まであったりします。

スパルタ生まれの元船乗りは、徳島から出てきて生糸検査所で働いていた美人と結婚して、4人の娘ができました。かれはギリシア流儀を守って、出す料理がみんな盛りがよかったので、平均して少食の日本人よりも外国人がよく食べに来ていました。長女のイレーネはほっそりした美人で、彼女にいかれて見事なヌード写真集を出したりした写真家もいたんですが、よく店に来ていたアメリカ大使館の文化担当官と結婚してワシントンに行っちゃいました。三女のソフィアだったかは、六本木あたりで遊んでいて田岡組長の息子と仲良くなって結婚したんですが、ひと月でもう嫌になって飛び出してしまった。その直後わたしは横浜のそごうで奥さんと三女にばったり出くわしまして、奥さんが言うには、田岡組のお母さんはよくできた人で、嫌なら嫌でいいけれどもきちんと挨拶をしてほしいと言われて、それくらいで済んだそうです。

元船乗りは奥さんに先立たれたんですが、80 を過ぎてからギリシアに帰りまして、85 歳でまた結婚しました。ヴェンダースがつくったキューバの音楽映画「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」にも八十何歳で結婚して子どもができたという話がありましたが、それと同じ話で、人生を楽しむ系統なんですね。

そういう点で、同じヨーロッパ大陸でも、アルプス・ピレネー以北の、ちょっとうっとうしい、やたらと理屈っぽいヨーロッパとは、ギリシアは全然違います。ギリシアは中東です。人間も、その生活文化も。先ほどの戦後フランスのアラブ研究の大御所、ジャック・ベルクさんは、ギリシア文明としてはアラブ文明ともものすごく似ていると言っていますが、そのとおりでと思います。

プラトンは『ティマイオス』の対話編で、ペルシアは大人でギリシアはまだ子供だということを書いています。身の程を知っていると言うべきで、ペルシア戦争でギリシアが勝ったことを、西洋が東洋に勝ったなんて言っていますが、こういう考え方はまったくナンセンスです。ペルシア戦争の事実を思い出してください。あれは、ペルシア帝国が百いくつあったちっぽけなギリシアのポリスを支配下に押さえ込もうとしたのに失敗しただけの話なんです。ペルシア帝国自体は御安泰で、別に滅んだわけでもなんでもありません。

ギリシアというのは山がちの石灰質の土壌で、そういうきつい条件でも育つ二次植生のオリーブやぶどうの栽培はできますが、穀物に関してはおよそ貧しいところです。昔、社会思想社『教養人の東洋史』という文庫本に、ギリシアの民のことをフェニキア（レバノン）人などとならぶ「出稼ぎ民族」と書いたんですが、たとえばシーラーズの近所にあるペルシア帝国の大宮殿をつくったのは、ギリシア人の技術者たちです。

ペルシア戦争のときも、ヘロドトスの『歴史』の中にペルシア軍の軍隊揃えみたいなことが書いてあって、これはどこから来たどういう軍隊かということはずらっと並べているんですが、その中にもちゃんとギリシア傭兵軍はいるわけです。ペルシア戦争では、ギリシア本土に 100 以上あるポリスの中で、アテネ、スパルタを中心とした 30 くらいがペルシアに手向かっただけで、あと 70 くらいはすぐに降参してしまっただけですが、傭兵隊としてペルシア帝国に雇われている者も何十万といて、アテネの軍隊なんかと戦ったりしていた。ですから、ペルシア戦争は、産業革命・フランス革命以後の近代ヨーロッパの戦争とは性格がぜんぜん違うものです。要するに、大ペルシア帝国がちっぽけなギリシアにもっと言うことを聞かせようとして、しくじっただけの話です。そして、ギリシアは別に西洋ではありません。まさに東洋のど真ん中のものです。

## 8 アラブ経由で受け継がれたギリシア哲学

平凡社で出した『世界史の第二ラウンドは可能か』にも書いたことですが、古代ギリシアというのは古代オリエント文明のスポークスマンでした。たとえば、タレスの学問はバビロニアの天文台の記録をもとにして作りあげたものです。ある事柄をやった人たちが、それを客観化するのには難しいんです。ところが、古代オリエント文明という巨大な文明に職人や商人あるいは傭兵として寄生していたギリシアの人々は、古代オリエントの人々が作りあげたものを客観化して、それを理屈に仕上げるのができた。古代ギリシアがやったことはそういうことです。

アルプス・ピレネー以北の西欧の人々が古代ギリシアの知的な遺産を引き継いだのはいつか、どなたか見当つきますか？ 18世紀です。イタリアの場合は14世紀くらいに、『デカメロン』を書いたボッカチオなんか古代ギリシアの文献をも対象とするようになったんですが、その後18世紀にいたるまで、古代ギリシアのいろんな文献がそのままヨーロッパに受け継がれることはありませんでした。それまでにアリストテレスやプラトンなどの名前が出てくるのは、すべてアラブ経由です。

先ほども申し上げましたアラブ医学というのは、古代ギリシア医学のピポクラテスや、古代ローマ時代のガレーノスの医学を、全面的に引き継いだものです。アラブ医学はそれらをより整ったものに仕上げ、12世紀ごろ、十字軍が始まって1世紀くらい経ってから、やっとアルプス・ピレネー以北の人たちがそういうのを学び始めます。スコラ哲学も、古代ギリシア哲学をそのまま引き継いだのではありません。古代ギリシアの学問を全面的に引き継いだのはアラブで、イブン・シーナー（英語訛りでアヴィセンナ）、あるいはイブン・ルシュド（英語訛りでアヴェロエス）などのアラブの哲学者・医学者の仕事を西洋の人々は学んだんです。

ですから、イギリスのエディンバラ大学で長いことアラブ研究に携わった、特に思想的な面での研究の大御所の一人であるモンゴメリ・ウィリアム・ワットさんは、自著の中で、アラブ文明のベースがなければ近代西洋文明というのはありえなかったろうと書いています。その本をわたしが翻訳しまして、『地中海世界のイスラム』というタイトルで筑摩叢書から出ています。大きな図書館に行けばあります。

12世紀から13世紀ごろにかけて、シチリアやイベリア半島のトレドあたりでアラブの学問のほとんどの分野がラテン語に翻訳され、それをアルプス・ピレネー以北の人たちが受け継いでいった。ただ、それはまだ基礎的なものでしたから、それがヨーロッパの学問の表面に出てくるのは18世紀なんです。18世紀ごろになって、やっとアルプス・ピレネー以北のヨーロッパは文明らしきものになった。

いま最後に申しましたことは、吉田健一さんという文芸評論家が言ったことです。吉田健一さんは、第二次世界大戦後の日本の国家システムをつくりあげたワンマン首相、吉田茂さんの息子ですが、なかなかできる方で、ヨーロッパというところは8世紀にもわたるくらいの戦国時代のあと、18世紀ごろになってやっと文明の段階に達したというんです。わたしもそのとおりだと思います。わたしはかつて21年間高校の教師をやって、少なくとも21回、世界史を教えました。昔の世界史の教科書はヨーロッパにたくさん頁数をとっているんですが、中身があまりない。けっきょく戦争の話ばかりです。産業革命・フランス革命以後の近代ヨーロッパは、国際法というもののいちばん中心部分は戦争のルールですよ。交戦国や中立国の権利義務などです。国家というものは戦争するのが当然だとしています。だからわたしは、近代西欧文明を「戦争文明」と名づけたわけです。

それはともかくとして、近代以前のヨーロッパというのはおおよそ日当たりが悪い、いちばんあとまで氷河がかぶさっていたために土壌も悪い。したがって、新大陸からジャガイモが入って定着する16～17世紀ごろまでは、ドイツやイギリスあたりの一般庶民はお腹がいっぱいになったことはなかったんじゃないかと言っている食品学者がいました。恐ろしく悲惨な条件で文明らしきものがあまりなかった。それがやっと文明段階に入って、かれら海外旅行なんかができるようになった。18世紀がかれの言う大旅行時代で、行ったところはどこか。地中海世界から中東です。

いままでの話でおわかりになるとと思いますが、わたしはアルプス・ピレネー以北と以南をはっきりと分けます。以南、地中海世界はむしろ中東と同じような性格の世界で、以北はそれとは非常に違った条

件のところでは、18世紀は、アルプス・ピレネー以北の貴族などのお金持ちの「グランド・ツアー（大旅行）時代」といわれています。圧倒的に地中海や中東に出かけていくんです。ナポレオンがエジプト遠征をやったのもそういう波に乗っていた。そこで初めて、古代ギリシア文明—中東の文明を理論化したものが、正式に近代ヨーロッパに引き継がれていくんです。

結論的に申しますと、文明の系譜論から言って、古代ギリシア文明を全面的にひきついだのはアラブ・イスラム文明で、12世紀以降、それにほとんどあらゆる面で学ぶことによって近代ヨーロッパ文明のもとが育まれていった。それが数世紀もかかって18世紀ごろにやっと熟して産業革命・フランス革命がおこり、近代ヨーロッパ文明なるものが世界を制覇してゆく。その過程で、西欧近代文明の母胎であったアラブ・イスラム文明があべこべに敵であったと偽造され、古代ギリシア文明は中世西欧をへて近代西欧にひきつがれてゆくとデッチあげられて幻想的な文明の系譜論がかたちづくられてゆく。古代ギリシアが近代西欧の母胎だという「世界史の中におけるギリシア幻想」が生まれたわけで、それはエドワード・サイードさんの言う近代西欧人のオリエンタリズムなるものの、いわばうらがわでありました。これで一応「世界史の中におけるギリシア幻想」なるものをお話ししました。

猪野 どうも三木さん、ありがとうございました。三木さんのお話は興味が尽きないのですが、申し訳ございません。時間の都合で終わりにさせていただきます。このあと討論をしようと思ったんですが、かなり、時間が延びておりますので、いったん、ここで15分間ほど休憩します。最後に、合わせて討論の時間を持ちたいと思います。今日は、アフリカを歩いてこられた方、インドを放浪されているお坊さんも、いらっしゃいますので、いろいろ、おっしゃりたいことがあると思います。ぜひ、皆さん、討論をお願いいたします。

第1回目のときに、針生さんがいいことをおっしゃっていました。いいださんの本に対して「何でもいいから質問すればよろしいんですよ」と。本当にそう思いまして、三木さんのお話に対しても、このあとの、いいださんのお話に対しても、皆さんに遠慮のないご質問やご意見をいただければと思います。これは学会のシンポジウムではありません。具体的な話でけっこうです。そういうことができる場にしていきたいと思います。

（途中休憩）

それでは、いいださんにメインテーマのお話をさせていただきます。前回は、時間がかなり延びて討論の時間をあまりとれなくなりまして、参加者から「主宰者の趣旨と反するぞ」と言われてしまいました。やはり、何かひとこと言って帰るほうが面白いと思いますので、今日のお話は4時半までにさせていただきまして、休憩を挟んで討論にしたいと思います。それから、第1回目から克明な記録をとっておりますので、いずれ雑誌にしますのでご了承ください。では、いいださん、どうぞよろしくをお願いいたします。

## リプライ講演

いいだもも

今日もこんなに多彩な方々がいらっしゃって下さり、お互いに楽しい討論が終わったあとには、二次会に参加される方もいらっしゃいますから、4時半までに切り上げることにいたしまして、そういう流れでいきたいと思います。

前回、わたしは勘違いをしまして、2時から始まるとばかり思い込んでいて、そのためころならずも、30分遅れてしまいました。申し訳ございませんでした。わたしは、NHKの「素人のど自慢」が大好きで、毎週見惚れておりますが、今日はゲストが細川たかしとわたしの大好きなキム・ヨンジャだったんですが、かのじょが歌うところまでいかないうちにここへ出て来ました（笑）。前回の失敗に猪野修治さんがすっかり懲りてしまって、わたしが遅れて来てはいけないというので、今日いらっしゃっている南さんご姉妹をわざわざ迎えによこしてくださいまして。ありがとうございます。次回も、また南さん姉妹がお迎えに来て下さると思っておりますので、間違いなく時間通りまいります（笑）。

今回は、金子務さんとなだいなださんが、コメントをしてくださることになっていますが、今日はその金子務さんがわざわざお見えになっていらっしゃいます。ありがたいことです。敵情偵察か、予行演習のような感じがしますが（笑）。金子務さんは、科学史家で、アインシュタインの有名な研究者で、ものすごい大学者です。最近、中公新書から、江戸時代のさまざまな人たちの群像を書いた『江戸人物科学史』というご本を、出されましたが、昨日、わたしは、それをめでたく読み終えました。これがまた、素晴らしいご本でして、方々を自分の足で歩き回って、緻密・周到に調べておられます。次回、お会いできるのを、たいへん楽しみにしております。

### 1 生態学的視点から歴史を見ると

今日は、わたしの朋友の三木亘さんにお出かけ願って、「世界史の中におけるギリシア幻想」ということを、お話しいただきましたが、三木亘さんのお話は、要するに、「古代ギリシアの幻想」ということから、今日の西洋中心主義的な世界観ならびに世界像ができあがったことを、鋭く解き明かしているわけです。そうした、きわめて特異な世界像によって、極東のわたしたちの頭の中はすっかり、よくいえば教育、悪くいえば汚染されてしまっていますから、或る意味では、三木亘さんのお話は、それと真っ向からぶつかった上で、脱構築をしますから、これまでの歴史教育を受けた人びとにとっては、ちょっと受け付けにくいところもあったであろうとは思いますが、やはり、三木亘さんのお話は、縦横無尽で素晴らしかったので、わたしは、それに多少補足させていただくかたちで、お応えしたい、と思っております。

何より素晴らしいのは、今日、三木亘さんがお配りになった「世界史の中でイラク戦争を考える」という論文です。あとでみなさんはお読みになるといいと思いますが、三木亘さんは、現代世界史の包括的な観点から、イラク戦争を読み解いておられることです。イラク戦争を論じるということは、非常にアクチュアルなこと、時事の問題、要するに新聞ダネのようなことですが、それを三木亘さんは、実にキチンキチンとブリリアントにやっておられる。三木亘さんのお話を聞いて、西部のカウボーイよろしくのブッシュという漢（笑）をテレビで見るのが、ますます楽しみになりました（笑）。

今年の初めからわたしは、ブッシュのイラク戦争は大失敗であって、年内にブッシュはイラク民衆に大敗北してしまって、イラクからの米兵の撤兵を余儀なくされ、世界は大いに変わることになるだろう、と言っているんですが、なかなか信じる人はいませんでした。しかし、現にイラクからの撤兵が雪崩を打つように始まっています。イギリスのブレア首相もじきに居なくなって、日本の小泉純一郎なる者もいなくなって、もうブッシュは、これ以上は持ちませんよ（笑）。最初は、わたしの言うことを、ほとんど誰も信じませんでした。いまは半分くらいは、わたしの話に結構リアリティがあって、いいだの大ボラもたまには当たるんだ（笑）とお思いの奇特な方も、たまにはいらっしゃる。年内には間違いなくイラク撤兵の開始です。ブッシュ米大統領とパクス・アメリカナの終わりです。これで、世界は、まちがいなく悦ばしい大動乱期（笑）に入るんです。

このような歴史を見る力がつくかどうかというのは、三木亘さんが今日おっしゃっているように、世界史の中で考える以外にないんです。その世界史というのは、通説では古典古代ギリシア以来の 2600 年間の世界史ということにされていますが、わたし流に言えば、それは 8000 年の地中海世界以来の世界史を踏まえていますから、人類史的に言えば、8000 年の歴史の蓄積をどう理解するのか、ということになります。中学、高校、大学と、2600 年間の世界史の了解の仕方を、西洋中心主義なり、日本中心主義なりの形で、すっかり刷り込まれてしまって、そのあとも毎日のように新聞などから偏見に満ちたヨタ記事を刷り込まれつづけているわけですから、それをひっくり返す話は、最初はアレルギーがあって、なかなか受け付けにくいものです（笑）。やはり、そここのところのブレン・ストーミングがどうしても必要不可欠になる、と思います。だからわたしの話も、思い切りみなさんのアタマを揺さぶります（笑）。

三木亘さんのお話に、第一に補足したいことは、三木亘さんが作ってくださった「地図」についてです。それをもう一度、開いて見ていただきたい、と思います。二点ある「地図」のうちの一つ目は、重要な有用植物の分布図です。「地図」の中に植物名が並べられていますが、食うものと住むところというのは、歴史の基本ですから、わたしたちが食うものにはいったいどのような歴史的分布があるのか、ということです。また、食うものの世界的分布というのは、気候の違いによって三つくらいに大きく分かりますけれども、そういうことでこの「三木地図」が構造的にでき上がっている。それを踏まえて、わたしたちの食い方の問題がきわめて説得的に出されています。

二つ目の地図は、「西洋」、「東洋」、「南洋」、と三つに分かれています。文明史的に見ると、世界はどういうふうに分かれるのか、ということです。上から緯度 40 度、30 度、0 度と線が引かれていますが、三木亘理論によりますと、真ん中の 30 度の線が「天下の王道」と言いますか、文明の基準なんですね。30 度から 40 度のあいだに、日本は入っている。ということは、日本というのは、世界文明を見る時に、かなり基準点になるわけです。

わたしたちの頭に刷り込まれているのは、40 度の線のところ、三木亘さんがおっしゃるように、ピレネー山脈よりもっと北寄りのほうです。地中海世界はというと、古代ギリシアを含めて、ピレネー山脈より南です。ピレネー山脈を挟んで、北と南が区別されるということは、非常に大事なことです。緯度や気候が違うだけでなく、人の顔立ちさえも違ってきます。それを「ヨーロッパ」ということで大雑把に一括してしまうから、問題の線引きが本当にはできなくなってしまうんです。

その線より北のほうに居る人たちは、実は昔から満足に物を食べたことがなく（笑）、寒いところで痩せこけて震えて、白茶けた顔をして、長い間というもの暮らしてきました。15 世紀から 400 年間く



らい、そこで世界史が曲がってしまって、そこが世界の中心みたいにわたしたちのアタマに刷り込まれてしまっているから、かれらは、昔も今も、肩で風を切って歩いておりますが（笑）、そんなことは、歴史の大勢から見れば、非常に例外的なことなんです。

北のほうでは、寒くてやるのが何もありませんから、本を読みますから、多少は頭がよくなるんですが、それ以上は大して取り柄のない、文明の外れだと思えます。そして、歴史というものは、うまく出来ているもので、北のほうは「一神教文明」なんです。二つ目の「地図」にも書かれてあるように、西洋世界は、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教の、バイブルに由来する一神教諸派の複合です。それぞれに多少の差異はありますが、大雑把に言えば、要するに「バイブル」文明です。「バイブル」というのは、非常にけったいなもので、ああいうイカものを信じる馬鹿（笑）が、ヨーロッパ世界にはたくさんいるので、その一神教の迷信をやっと持っている文明です。

しかし、最近はやっている『ダ・ヴィンチ・コード』という映画を見ますと、それなりによくわかってきますが、内部から聖書を覆そうという動きは、ヨーロッパの中にもずっと久しくあったわけです。何千年というばかばかしいキリスト教神話に基づく歴史のヨタ話をそのままには信じない流れは、クリスチャン自身の中にもあったんですね。映画では、じつは、イエスとマグダラのマリアは夫婦であって、教会秩序は権威を守るために、その子供を次から次へと殺していくんですが、マリア修道会を中心に、それに連綿と抵抗する流れが、「ダ・ヴィンチ・コード」として伝えられているというわけです。レオナルド・ダ・ヴィンチが「最後の晩餐」に描き込んだ暗号というのは、じつはイエスの横には女がいて、イエスと女がそこで親しげに食事をしていた、ということでした。その「共食」の絵解きの話です。そういうところに、今日、一神教の問題性があぶり出されています。

## 2 アクチュアルな時代の産物

カール・ヤスパースが、「融合の時代」ということを言っていますが、ヤスパースの史観は、人類文明史あるいは思想史として考えてみますと、非常に重要なものです。人類史がどこで、文明前史から文明史に成るかという、そこには当然「融合の時代」という歴史的切断線が入っており、中国でいうと孔子と老子、イランだとゾロアスター教、インドだと釈迦とジャイナ教が出てくる。西のほうでは、当時は東よりずっと野蛮なところでしたが、それにしてもやはり、キリスト教が出てくる。世界史的に見ても「融合の時代」というのは、大きな画期であるわけです。それは、言葉を変えていえば、「啓示宗教の時代」です。天から言葉としての啓示が降りてきて、「光あれ！」となるのですが、それに基づいて、人類が啓蒙的な文明史の領域に入ってくる。ですから、西洋が一神教であることは確かですが、それはいちばん西のほうの、当時でいうと、きわめて暗かった地方のローカルな流れなんです。

東洋における「融合の時代」の産物は、「地図」で三木亘さんが整理されているように、儒教と道教と仏教です。儒教は孔子、孟子、道教は老子、荘子、仏教は釈迦とジャイナですが、この三教が複合した古代東洋文明ができた。東洋に属しているわたしたちは、空海以来、三教の複合文化の中で育ってきた。弘法大師の謂う「三教指帰」ですね。

その回想的伝統は、明治維新以来すっかり失われてきてしまいましたが、単なる「西洋化」「近代化」のために失われるには惜しい文明である、とわたしは思います。「三教一致」というのは、わたしたちの伝統の中にちゃんとあって、それは捨てるべきものではなくて、これから東西文明の最後の出会いが

起きますから、そこでぜひとも活かすべきものであるわけです。

先ほど三木亘さんもおっしゃいましたが、たとえば大学というものを考えた場合に、西洋のパリ大学やケンブリッジ大学のほうが、極東の島国日本の高野山大学よりよほどずっと遅いわけです。高野山大学は弘法大師、つまり空海がつくった大学です。空海は、日本の最大の思想的巨人の一人です。司馬遼太郎の『空海の風景』も含めて、わたしたちはどれだけ空海に関する本を読んだかわかりませんが、やはり高野山大学は、世界最初のきわめて高度なアカデミーなのです。

空海の時代は、世界文明史でいうと、もうかなりディケイしている文明です。ディケイしているというのは、かれが唐土に渡って学んだときは、すでに「三教複合」の中の仏教は、そのそもそもの本貫の地であるインドでは、もうすっかり「タントラ仏教」になっていて、「ヒンドゥー教化」していた。仏教は、或る種の排外主義を帯びた基層の宗教文化であるヒンドゥー教と比べてみれば、その当時の古代ローマ世界帝国との世界交通に結びついた、それは、お釈迦様の普遍宗教です。世界的普遍性を固有していました。そして、インドは 30 度の線、つまり「天下の王道」のところに位置しておりますから、そこで出来た釈迦の仏教というのは、当然、バラモンのカースト社会を超える普遍的な人間交通ですから、そのことによって、一時期、非常に力を得ますが、だんだんとローマと北京とのあいだのシルクロード的交通が衰えてきて、下部のほうからヒンドゥー教がもう一度抬頭してきます。今日のインドの右翼政権党「人民党」ですね。

ヒンドゥー教も、たいへん興味深いインド土着宗教であり、男と女が抱き合っているところを絶えず彫像にしたり、絵にしたりして、暮らしている文明です。男女和合の即身成仏の教説で、日本では、空海の「真言密教」から出た「立川流」が、その文化を引き継いでいます。文覚上人が始めた「立川流」は、のちに徳川幕府の大弾圧によって滅んでしまいましたが、これも非常に面白い文化です。文覚上人が開いた宗派で、即身成仏を説いて、男と女が抱き合った姿が、この世のすべてである、としています。これは或る意味では「性」の絶対的尊重として正しい、とわたしなりに思いますし、仏教としても正統を行っている、とわたしは思います。

セックスによる繁殖が無ければ、そもそも人間社会の再生産自体が成り立たない。しかし、「真言立川流」は、「不受不施派」の日蓮宗や天草の四郎時貞の「切支丹」＝キリスト教と同じで、江戸時代を通して厳密な国禁イデオロギーでしたから、その伝統も徳川時代三百年にわたった鎖国の中で、すっかり絶えてしまいました。そろそろ、わたしたちにとっては、それを復活すべき時がきている、と思うんですが。そういう意味では、日本には基本的に「開かれた文明」というのが、伝統的にチャンとあるんですね。

三木亘さんの「地図」によれば、南洋では仏教とヒンドゥー教ですが、これはいま申し上げた問題ですね。インドでは、下層のほうでヒンドゥー教で、上層のほうで以前は仏教です。仏教の変遷史で非常に不思議なことは、日本は、インドを本貫の地とした仏教の吹きだまりみたいなところでして、そこに正倉院があって、東大寺ができて、奈良の大仏が建立され、そのもとで生きている仏教の中でわたしたちは久しく暮らしてきている。たとえ徳川期に「宗門改メ」を担当していた権力の走狗的な仏教であり、また世俗の日常生活では「葬式仏教」であっても、なんとも思わずに落とし切ったそうした通俗仏教文明を、わたしたちは久しく享受してきました。ところが、何度でもわたしは強調しますが、その本貫の地であるインドでは、仏教は無くなってしまいうんですね。

インドで、仏教がもう一度復興するのは、アンベードガルを待たなければなりません。かつてブラック・パンサーのインドの若い指導者が、わたしのところに遊びに来て、よく討論をしましたが、かれらが信奉しているのが、アンベードガルの「ニュー・ブディズム」です。アンベードガル博士は、マハトマ・ガンジーとともに現代インドをつくった偉い男で、初代法相として、インドの「新憲法」も作りました。かれが「ネオ・ブディズム」というものを開始して、現在はその信者が 10 万人くらいインドには居るんですかね。

しかし、今のインド政府は、「人民党」というヒन्दウー教の右翼チックな政党が牛耳っていて、これがまたものすごく乱暴な右翼チックな政党でして、しょっちゅう「アヨーディア事件」のような事件を引き起こして、イスラーム教徒と疑われる人びとをぶっ殺すようなことを平気でやらかしています。事実上の一神教支配の「国家タントリズム仏教」です。

さらに、三木亘さんの「地図」では、新大陸アメリカは、ニューヨークかワシントンあたりが 40 度で、メキシコあたりが 30 度です。ピレネー以北と以南で分けると、先程も述べたように、西洋に属するところは（30 度から 40 度のあいだに）ほとんど入らない。「ピレネー以南」は、地中海文明に属していて、地中海文明というのは、むしろ中近東の方に近い文明圏だというふうに考えますと、世界史の真相が非常にくっきりと見えてきます。

重要な有用植物の分布図のほうは、もう一度強調しておきますと、食う問題の図式化です。わたしたちは、単純に「小麦の文化」と「米の文化」に分けていますが、酪農牧畜の問題を抜きにすれば、粟が主食であった縄文文化、あるいはニシンが主食であったアイヌ文化の後を承けた「弥生文化」は、「米の文化」に属しており、全地球世界上では、人類の主食は、小麦と米とトウモロコシの三つに大きく分けられて、その分布には、文明的な必然性があります。こうして、わたしたちが食っているものの根元的なところが、頭にすっきりと入ってきます。これは、この「地図」を見てのわたしなりの感想ですから、訂正すべきところがあれば、あとで訂正していただきたいと思います。

### 3 「土曜の順序」ということ

前回の討論のさいにご発言をいただいた聴衆参加者の勝木渥さんから、司会の猪野修治さんを通じて、今日「古代天文学の布石 土曜の順序」というパンフレットをいただいたんですが、これが、三木亘さんのご発言との関係で、非常に面白いものです。日月火水木金土で七曜ができますが、東洋・西洋・南洋を問わず、この七曜が暦日の基準になっています。つまり、これは、或る種の文明の暦日的・天文的な基準である、ということです。

わたしは、よく「概念の分割」ということを言いますが、Begriff というのは「分割」ということです。これヌキに「文明」というものはありえない。東洋世界では、秦の始皇帝がつくった「万里の長城」というもので、概念の分割線が、東アジア・ロシアの大草原の広大な地帯に入ったことによって、その向こう側の、「農耕文明」には属さない草原の民である匈奴や突厥、そしてモンゴル帝国にいたるまでの「牧畜文明」と、わたしたちが文明的な陶冶を受けた中華文明の大本になっている「農耕文明」とが、区別されました。

このだいたいな区別がもしなければ、どこまで行っても、牧畜民は農耕民の中に攻め入ってきて、ぐちゃ

ぐちゃになってしまう。それを目に見える形で食い止めたのが、この「万里の長城」という分割線ですから、秦の始皇帝というのは、「概念の分割者」だというのが、わたしの昔からの基本的な考え方です。これが「始皇帝の 歴史的意味です。概念の分割線を構築したことで、「牧畜文明」と「農耕文明」とが、はっきりと区別されたわけです。

「土曜の順序」というものも、それと全く同じことです。これは、非常に面白い論文なので、ぜひ次回、皆さんにも配られるといいと思いますが、ここで言われていることで、三木亘さんのお話と関係があるのは、一つは、イスラームの場合は、日曜日が休息日ではない、ということです。日曜日が休息日なのは、聖書によれば、神様のご都合（笑）で、神様が六日間ぶっ通しで働いて、七日目にはすっかりくたびれてしまって、休んだわけでしょ（笑）、それが日曜日で、近世日本人がオランダ読みして「ドンタク」ですね。この日に日本人も休むようになった。

しかし、イスラームでは、いま世界人口の三分の一がイスラーム教徒ですが、かれらは、日曜日ではなく、金曜日が休みだと思っている。だから、「必要の順序」というのは、一様化している方向に行っているけれども、なおかつそこには、文明圈的にそれぞれすこぶる意味のある差異のあるアクセントがちゃんとあって、日曜日を休みとしている文明圏と（日本は明治以来そうになっていますが）、金曜日を休みとしている文明圏とのあいだに、大きな区別が今でもある。なにしろ、現代人の三分の一が、金曜日をお休みにしているという単純なことを忘れてしまえば、現代世界のことは何一つ見当がつかなくなります（笑）。

要するに、暦でいえば、わたしたちも今では「西暦」を使っていますから、さしあたり、わたしたちは、西洋中心主義的文明ですが、と同時に、世界人口の三分の一という、決して少数派とはいえない人たちが、「ヒジュラ暦」という、キリスト教の西暦とはぜんぜん違う暦で、世界暦年を数えている。世界の三分の一の数の人たちが、毎日メッカの方向を向いてお辞儀をして、自分の位置とロケーションと暦とを絶えず再確認しているわけです。2006年とか、21世紀とか考えていない人たちが、現にそれだけ存在しているということを、ときどき思い出してみたほうがいい、とわたしは強く感じ、思います。

いわゆる「9.11 事件」以後、ハンチントンの謂う「諸文明の衝突」が非常に重大な事実として論議されるようになってきていますが、それは、「ヒジュラ暦」と「キリスト暦＝西暦」との衝突なんですね。これが将来どうなるかは、これからの抗争と和解との長い長い歴史過程を経て、文明がもう一度東西混濁化する中で、恣意的にはなく、万人の経験として、だんだんに作られていって、或る普遍的な一義的な形を次第に取ってくるだろうと思います。そういうことを、三木亘さんの教えにしたがって考えておくということは、いま非常に大事なことだと思えます。

#### 4 ペルシア帝国は、いつ滅んだのか？ 古代地中海ポリス国家は？

もう二点、三木亘さんのお話に補足させていただきます。

その一つは、「ペルシア戦争」に関する問題です。前回もお話ししましたが、わたしのこの三部作のうち、Ⅱ巻とⅢ巻の重要な主題の一つは、古代ギリシアが世界史の始原である、というのは、三木亘さん流に言うならば、全くの「幻想」である、ということです。その「幻想」のもとには、三木亘さんが強調されているように、「オリエント」のペルシア大帝国が、地中海のアテネやスパルタという「オクシ

デント」の小さなポリス国家を征服しようとして、サラミスの海戦と Marathon の戦いで逆に敗れてしまったことに、その発動の起点があります。前回くわしく申し上げたように、これが、ヘロドトスの『ヒストリアイ歴史』での大主題なわけです。

実際は、ペルシア大帝国は、そこで滅びたわけでも何でもないので、西洋史では、東の家父長制的で貢納制的なオリエント文明の代表であるペルシア大帝国が、もっと開けたポリス国家である地中海文明によって撃退され、そこで「オリエント」から「オクシデント」への大転換が生じた、とされています。

Marathon の戦いでのエピソードは、現在オリンピックの競技名「マラソン」にもなっていますが、そういうかたちで、神話化された歴史を、わたしたちはずっと刷り込まれてきて、今日の西洋中心的な歴史を何ら疑うことなく、アンチ・フェミニズムが愛されたかたちで、とうとう今日のブッシュや小泉純一郎の「男性」型文明に行き着いてしまった（笑）。三木亘さんが、横須賀に近いところの居酒屋で聞いている小泉純一郎の評判なんかは、小泉首相がいかにもまったくバカバカしい人物であるとしか言いようがないものですね（笑）。このブッシュ・小泉型の文明を何ら疑うことがない、という奇妙な大錯覚の中で、今日のわたしたちは生きているわけです。もうそろそろ。そういう悪思考から目を覚まさないといけない（笑）。

この前もお話ししましたが、ペルシア大帝国の先遣隊が、ポリス国家に敗れたのは事実ですが、あれはそれ以来、ホンの二次的・副次的なことなだけでしてね。本体のペルシア帝国は、実は、ほとんど無傷であったのですから、そのあとも、地中海世界をずっと操縦していたのは、ペルシア大帝国の方だということが、たいへん重要なんです。

サラミスと Marathon では確かに負けましたが、別にダリウス大王が負けたわけでも、ペルシアの大陸軍・大海軍が負けたわけでも、何でもありません。或る意味では、アテネ、スパルタのようなギリシアのポリス国家を操作していたのも、いぜんとしてペルシア大帝国なんです。だから、その操作の通りに、古代ギリシアの大内乱である、アテネとスパルタとの長い長い死闘の繰り返しである〈ペロポネソス戦争〉が起きてしまって、ポリス都市文明の総体がこの内輪もめで衰退を余儀なくされてゆくことになったわけです。歴史的事実としてそうである、のです。そのことは、わたしのこの本に詳しく書いてありますから、もう一度、お確かめいただきたいと思います。

ペルシア戦争のあと、ペロポネソス戦争が起こります。古代ギリシア内のポリス国家同士の戦いですね。「市民戦争」のハシリです。ペルシア戦争のことを書いたのは、ヘロドトスで、ペロポネソス戦争のことを書いたのは、ツキディデスですが、両者の『歴史』は非常に面白いもので、一貫して読むと、この二つの戦争の違いと繋がりがよくわかります。

ペロポネソス戦争は、外敵との戦いではなくて、内乱なんです。シヴィル・ウォーです。今も申し上げた「市民戦争」です。アテネとスパルタとの死生を賭した戦いが、数十年にわたって続き、最後はアテネの敗北に終わります。したがって、東地中海世界に在って、海外へ大いに雄飛して国際貿易を最大限発展させていた、いわゆる「アテネ帝国主義」は、結局のところ「帝国」としては完成しないで、アテネのギリギリの大膨張がいわば頭打ちになったところに、ギリシア全体の内戦における、スパルタとアテネとの抗争が重なる。この戦いの出血によって、ひとりアテネばかりでなく、全体的にポリス国家群が衰弱していくわけです。

わたしは、ペロポネソス戦争の帰結を見て、この戦争の糸を引いて叛乱を起こさせていたのは、間違

いなくペルシアであって、その卓越したペルシア帝国の外交戦術の奏功によるものだと思います。ですから、ここがかんじんな点です。ペロポネソス戦争の正当な評価は、ペルシア大帝国の政治外交を抜きにしてはありえません。

ペルシア大帝国は、サラミスやマラトンでアテネに確かに一敗地に塗れた後でも、依然として健在で在り、実際はそういう間接操作を通じて、地中海世界を支配していました。しかし、ペルシア戦争のあとはもう、ペルシアがオリエントを代表しなくなったと早トチリして、ヘーゲルを含めてみなそのあとは敗者復活戦もなく、ペルシアはどこかに行ってしまいました。それが今になって「ホメイニ革命」によるイランの復興となって、わたしたちの前にまた出てきているわけです。

しかし、そんなことは一切無視・黙殺して、みんなただただヘーゲルの歴史観をありがたがっていますが、ヘーゲルの歴史観はすこぶるけつたいなものですよ。わたしたちに即してみればばん変なのは、日本が全然出てこないことです（笑）。ヘーゲルの「世界史の哲学」は、ご承知の通り、モンゴルから始まるんです。モンゴルは、最初の「一人の専制帝国」ですから、ヘーゲルによれば、「自由の意識における進化」論によって、滅ぶべくして滅びますが、それからは「数人の自由」であるインドに世界史は移って行って、そのあと、「万人の自由」であるヨーロッパに行く、という、幼稚と言えれば幼稚きわまる一方通行の世界史の構成になる。最後は、「プロテスタントのプロイセン」が出てきて、万歳（！）となる。これは全くもってヘーゲルの自画自賛なわけでしょう（笑）。歴史はこれで成就して終わり、あとはまた神話があるだけだ、というわけです。これは、本当のところ迷信そのもののような世界観です。フランシス・フクヤマ式に言えば、これで「歴史は行き止り」となって、「歴史の終焉」となります（笑）。めでたし、めでたし（笑）、全くもっておめでたい噺です（笑）。

それから、ヘーゲルの「世界史」では、ヨーロッパはプロイセンで行き止まりになってしまいますから、アメリカは「未来の国」だということで、やはり出てこないんです（笑）。どうですか？ 20世紀になると、そこにはヘーゲルの「世界史の哲学」にはちっとも出てこない、ロシアとアメリカが、世界史の主人公になっていて、世界的なコールド・ウォー（冷戦）がグローバルに出てくるわけですが、その米ソ超大国は、ヘーゲル的な世界史哲学では足がすっかりはみ出してしまう（笑）。というよりは、ヘーゲルの「世界史」の方がちっぽけな尾っぽみみたいなものなのです（笑）。現代世界史では、大事なものは米ソなんであって、それは誰でも知っているように冷戦期を通してずっと、そうであったわけです。

1979年にいって、スターリン主義の「一国社会主義体制」が滅んでしまった後も、〈パクス・アメリカーナ〉の一元的な新自由主義支配下にある現在でも、ドル・核帝国アメリカという超大国を抜きにして、世界史を語ることは絶対にできない。わたしのようなアメリカ嫌いであろうと（笑）、歴史の捉え方としては、それ以外ではありえない。「ヘーゲルの世界史」は偉いものだと思いますと、そういうことの初歩的な解さえまったく出来なくなるということがある。もちろんのこと、それではだめなんです。ですから、やはり、三木亘さんのような世界史観でもって、ものを考えるほかないわけです。古代のペルシア戦争の評価の問題も、そうです。

さて、ペルシア戦争後も、ペルシア帝国が相変わらず地中海世界を操作していて、ペロポネソス戦争を起こさせて、内争によるポリス国家の自己没落を図りましたが、それは実際に着々と成功を収めて、やがてペルシアは、エジプトを完全に併呑してしまいます。これで有史以来最大・最高の古代王朝史であったナイル河畔の古代文明の精華—あのスフィンクスとピラミッドの偉大な古代文明—が滅亡してしまうわけです。

何度も繰り返しますと、ペルシア大帝国が地中海世界のヘゲモニーを、ポリス国家群と争って Marathon とサラミスで局地的には敗北しますが、いぜんとして、あの偉大なエジプト文明—何しろナイル河の例年の氾濫を処理してしまわなければ、あの文明は存続しえませんが、あのピラミッド文明は幾何学と測量術と天文観測によって、厳密に数学的に構築されていたわけです。それを併呑してしまったくらいに、ペルシア大帝国は、オリエン特世界のなかでの一大帝国として、依然として健在であって、むしろ大隆盛期に在るわけです。そのところを、ヘロドトスの『ヒストリアイ』にならってポリス国家中心式に処理してしまうと、「地図」は本当には描けなくなってしまうのをええない。

エジプトというのは、5000 年に及ぶ王朝が続いていた、当時世界一の大河川文明ですから、気の遠くなるような話です。これはいうまでもなく、地中海文明の有機的一環にあった、太陽とピラミッドとスフィンクスの文明ですが、太陽神の信仰も一種の啓示宗教であって、それでエジプトは一元化するわけです。エジプトは地理的に見ると、山脈があって、それを越え内側に囲まれた大地にナイル川が流れているのであって、ナイル川流域を中心として割合に自閉されていますから、こういう一元化した文明が、5000 年ものあいだ、王朝が何代も代がわりしながら持つんです。しかし、とうとうその大文明が、ペルシア帝国によって併合されてしまいます。だから、サラミスの海戦と Marathon の陸戦の以後に、ペルシア大帝国と古代文明、エジプト大文明をも併呑して、地中海世界史的に出現してくるわけです。

ペルシアは自分では戦わずに、ヘーゲルの「世界史」の進行予定表では、とっくの昔に世界舞台から没落してしまって地球舞台から居なくなっているように処理されているにもかかわらず、大軍勢を擁しながら、5000 年も続いてきた巨大なナイル河川文明を滅ぼしてしまっているわけですが、そのところをちゃんと看なければならぬ。ポリス都市文明国家といたって、その実態は、この地中海のヘゲモニー闘争の折には、オリエン特のペルシア大帝国がエジプト文明征服のために備った「傭兵」にすぎないわけです（笑）。傭兵のポリス国家兵—これは、戦士共同体としてのポリス都市国家に特有な小土地所有者の自前・自弁武装であるわけです—を使って、ペルシア帝国はエジプトを征服して併呑してしまいます。その傭兵のほとんどは、ポリス諸国家のギリシア人なんです。ここがかんじんな目のつけ所です。

そして、三木亘さんもおっしゃっているように、古代ギリシア文明はもともと戦争文明でして、戦争を知らずしてギリシア文明は語れない、ということからも分かるように、そのころのギリシア人は、ペロポネソス戦争の内戦に上も下も総動員されているか、ペルシアの傭兵になってエジプトに行かされているか、のどちらかだったんです。それが非常に大事な点でして、その了解なしに、ギリシアは「叡智（ヌース）の文明」だなんていうのは、たわいのない話です。あの都市国家の「市民」とは、要するに「戦士」なのであって、その戦士が総力を挙げて戦った「市民戦争」は、ペロポネソス戦争という大内乱の主体であったわけですが、今度はそれが、ペルシア VS エジプトの国際戦争の「地球的傭兵」の主体となっているわけだとして、今や「農耕地防衛」ではなくなっているわけです。

では、次に、どこでいったい、ペルシア帝国とポリス国家とが滅びるかということ、これもとても重要なことですので、わたし自身も、本書の第Ⅱ巻・第Ⅲ巻で、力を込めて書いていますけれども、それは、アレクサンドロス大王の大東征によって、です。かれアレクサンドロスが、マケドニアからインドにわたる「ヘレニズム時代」をつくりあげた時のことです。「ヘレニズム時代」というのは、一種の「世界帝国」の時代です。この過程的媒介をぬきにして、ポリス都市国家がどうやって、ローマ世界帝国へと歴史的に転化したのか、という古代の世界史の大きな筋書きは、全く見えてきません。ポリス国家が、

ずっと言われ続けてきているように、ヘロドトス以来の「ギリシアびいき」の連中としては、そんなに簡単に滅びるはずがない、と思いたかったのもそれなりに無理ありませんが、やはりそこには、解き難い矛盾があったから、滅ぶべくして滅んだんですね。

## 5 アレクサンドロス大王の東方遠征

ポリス国家は、非常にいわば自意識過剰でして、膨張した自負心ばかりが強くて、ほとんど自己幻想と自己錯覚—三木亘さんのおっしゃる「ギリシア幻想」とは何よりも、古代ギリシア人的な「自己幻想」なわけのものです—の中で生きていますから、マケドニアに対して、この貧弱な山岳地帯の賤民めといったポリス都市国家の偽りの「文明幻想」をたくましくして、マケドニアのアレクサンドロス大王に対して、チョコザイな反乱を起こしました。その先頭に立ったのが、有名なデモステネスですが、アレクサンドロス大王の大東征の開始によって、デモステネスのポリス国家は、最後の一人にいたるまで完全に殲滅されてしまい、地中海世界史のヘレニズム世界帝国化は、怒濤の勢いで進行してゆきますから、無分別で高慢不遜な高ぶりのままに、反マケドニア・反アレクサンドロスの笑止千万ともいべき反乱の尻馬に乗っていたアテネやスパルタは、それを見て、すっかり慌てふためいて（笑）、若きアレクサンドロス大王に降伏し、自己解体してしまいます。

東征に先立って、アレクサンドロス大王は、あらかじめ、その背後に在る煩いをこうしてすっかり取り除いてしまうべく、ポリス国家をこの際温存すべからずとして、ことごとくすべてトコトン壊滅してしまっただけです。そして、後顧の憂えがこうして消え去ると、いよいよ東へ向かいます。そこで、ペルシア大帝国との対決になるわけです。

このところの歴史の前後関係をあべこべに刷り込まれたままでは、この古代地中海文明の結末は、全くもって見えてきません。ここで大事なのは、オリエントとオクシデントの本当の対決は、ペルシア帝国とマケドニア帝国という、「オリエント世界帝国」と「オクシデント世界帝国」とのぶつかり合いだった、ということです。そして、この世界史的対決に、アレクサンドロス大王が率いる「マケドニア帝国」が勝って、ダレイオス大王が率いるペルシア帝国の側は無残な敗北を喫して世界舞台から亡くなってしまっただけです。

戦いは三回続発して、いずれも血湧き肉躍る壮大きわまるものでした。ヘロドトス『ヒストリアイ歴史』の「驚異の念」は、むしろここでこそ、感受されるべきでした。むろんのこと、ヘロドトスはとくに亡くなってしまっていますから、『ヒストリアイ』のずっと後の出来事ではありますが。両軍とも、アレクサンドロス大王とダレイオス王との双方が、いずれも 50 万くらいの兵隊を擁して、大動員していますから、世界史上にそんな大戦争はまさに前古未曾有なわけですね。現代の第二次世界大戦としての独ソ戦や米英連合 VS ヒトラーの第二次世界大戦にいたるまで、こんな大戦争は無いわけですね。

上杉謙信と武田信玄ではないですが、一度はペルシア軍がアレクサンドロス大王の軍に斬り込んで、アレクサンドロス大王自身が負傷を蒙って、あわやというところまで行くんですが、かれはアキレウスを「憧れのヒーロー」にしている強烈なカリスマ性の持ち主ですから、何とかその危機を切り抜けて盛り返します。それぞれ 50 万もの大兵力を総動員しての前代未聞の真の世界戦争であるわけですが、やはり最後は、率いている者のカリスマ性と気力の強さに依るんですね、勝敗の程は。それで、とうとうたまたまに、ペルシア帝国のダレイオス三世は戦場から逃げ出して、離脱してしまいます。これが三度



の大会戦で、ペルシア帝国側が負けと出た転換点です。たとえ 50 万の大軍でも、昔は家父長制と神聖帝王朝とのもとに結束した軍隊のことですから、王様が居なくなってしまうと、全軍が総崩れになってしまいます。こうして、さしものオリエン特帝国も、ついに滅びます。

アレクサンドロス大王というのは、非常に高度な政治テクニックを持った武将で、自分が滅ぼしたペルシア帝国の継承者に自らを擬します。多くの部下の将兵とちがって、かれはけっして「マケドニア主義」ではないんですね。どういうことかと言うと、ペルシア帝国の最後の王が逃げていくのを、アレクサンドロス大王は、どこまでも追及して行って、最後の場面は、僅か三十騎を引き連れて、巨大な敵陣よりもそのアレクサンドロス先駆騎兵隊が先行して、道端に遺棄されている馬車の中で、ペルシア帝国の最後の王が、息も絶え絶えになっているところに、行き着きます。敗走のペルシア大王は、身内の太守に裏切られて、刺されたんです。そのいまわの際に間に合ったアレクサンドロス大王は、これでペルシア帝国は終わりだ、と悟ったペルシア王に「後事」を託されるわけです。

アレクサンドロス大王は、そのダレイオス三世の末期の願いを聞き入れて、ダイオレス三世が遺した王妃や子どもたちに食俸を与えることを、約束します。それからあとのアレクサンドロス大王の戦いの大義名分は、ペルシア帝国の王を殺した太守を征伐することになります。王の遺志を自分が代行するというかたちで、ペルシア帝国を征服していくわけです。このところは、アレクサンドロス大王体制の性格を見るうえで、とても重要なことです。だから、アレクサンドロス大王は、このペルシア大帝国の正規な正統の王位継承者であるわけです。

こうして、ポリス国家群もペルシア帝国も平定してしまっ、アレクサンドロス大王は、どんどんさらに東へと進んでゆきます。そして、インダス川を渡って、インド領内へと深く進攻し、パンジャブ地方の国家と戦争をします。当時のインド軍は精強を以ってよく知られていましたが、その理由は戦象、つまり、戦闘用の巨象を何十頭も駆使しているからなんですね。当時の資料によると、アレクサンドロス大王は、180 頭くらいの戦象を擁するインド辺境国の軍隊と激突します。ここでも、アレクサンドロス大王は、あわやというところまで行くんですが、最後は「アキレウスの勇気」をまたまた発揮して、インドの戦象軍隊を殲滅してしまっ、その国王が帰順すると、また高度な政治テクニックを発揮して、パンジャブ王の本領の民を安堵させます。

アレクサンドロス大王は、さらにそこから先に進もうとしますが、マケドニアから引き連れてきた精鋭部隊が、長引く戦いですっかり不満をつのらせ、もう何が何でも郷里に帰りたい、と言って反乱寸前になります。それで、かれアレクサンドロスは、不承不承に兵士たちとともに、バグダッドに引き返して、そこで死にます。その最後については、バグダッドに一日も早く帰りたかった側近の部下によって、一服盛られたという説もあります。

アレクサンドロス大王は、それまでも近従によって何度も、刺されたり、毒を盛られたりしていますから、それは必ずしも荒唐無稽な説ではありません。また、東征する地でアレクサンドロス大王は、かれの高度な政治的テクニックからペルシア方式を採用し、普遍性をつくることには成功しましたが、内部に反乱要因を抱えることになってしまったわけです。

要するに、アレクサンドロス大王の「普遍政治の概念」からいうと、マケドニアやギリシアが言っている「ヌースの普遍性」などというのは、実際には普遍でも何でもなくて、かれがよく熟知している「マケドニア主義」「ギリシア主義」の固陋きわまる墮落にしかすぎないわけです。やはりそれは、「ペルシ

ア方式」を取り入れて、お互いに結婚をする通婚の形を取って自他交通を図らざるをえない。アレクサンドロス大王が催した、自分とペルシア王女との大結婚式というのは、東西を混淆する大宴会であって、それは「ヘレニズム帝国」の形成の生理的基礎になるんですね。

アレクサンドロス大王自身は、三人の王后をペルシアから迎えることによって、東西混淆を図っています。東西文明の混淆というのは、古代世界史の一大価値転換です。ヘロドトスの『ヒストリアイ』が「驚異の念」を以って、しかと見届けた東西相分れた後の、その後の価値再同化の通婚こそが、古代世界史のとどのつまりの価値同化なわけです。それは、今日の時代にいたるまで、連綿とつづいている大問題です。この本も、そのために書かれています、

「ヘレニズム世界帝国」に即して言うと、リアルな実際問題として、結婚や生殖の問題も含めて、人種的に混淆しなければ、本当の普遍帝国（世界帝国）はできっこない。アレクサンドロス大王は、それを実際にやろうとしましたが、かれの志は必ずしも旧弊で保守的なマケドニアの人たちに理解され、受容されたわけのものではなかった。それでひょっとすると、アレクサンドロス大王は近臣たちに一服盛られて頓死してしまい、「ヘレニズム世界」化はそこで、かれにとってはすこぶる不本意に終わらせられてしまいます。

マケドニアというのは山国で、元来がひどい固陋・旧弊の民なんです。「ヌース」でギリシア文明的に開けているどころの話ではない。アレクサンドロス大王の父親のフィリッポス二世は、残虐無比の王でして、有名なマケドニア溪で、腹が減っている部下に対して、飯が食いたければ、前へどんどん進んで行け、そうすればメシにありつける（笑）というわけです。山国の命知らずの軍隊が、飯のためだけに、次から次へと前へ前へと乱暴狼籍の限りをほしひままにしながら、進軍していく。いわゆる「進メ、進メ、イザ進メ」というわけだね。このフィリッポス戦法は、当時においては、前代未聞の革命的な戦法の発明であって、なにしろ兵士としては、メシにありつけるわけですから、次から次へと大々前進あるのみになります（笑）。

そういう軍隊の先頭に立っていたアレクサンドロス大王が、インドまで前へ前へと休みなく進んで行くわけです。マケドニアは、そういう山国の前進あるのみの文明ですから、アレクサンドロス大王の世界帝国が「ペルシア方式」をどしどし取り入れてゆくことに、かれの直属の部下であったマケドニアの傭兵は、とうてい耐えられなかった。そういう不満が内部を引っ張ったんです。このことは、きちんと記憶しておく必要があります。

わたしに言わせれば、「世界帝国論」としての古代の解析問題は、オリエントとオクシデントとの両方を含めて、この一点に集約されますから、ヘロドトス以来、西洋史学で一番重要視されてきた「ポリス国家」の問題というのは、歴史をちょっと浮かしてひん曲げてしまっているわけのものにしか過ぎません。そこからたまたま調子づいて、西洋中心主義文明は、現在のようにグローバルになり、ブッシュのイラク戦争まで来てしまいましたが、わたしは、この西洋中心主義文明は、ここで必ずや一巻の終わりになるだろう、と思っています。天下の本道のほうは、「世界帝国」だと思います。

## 6 マルクスの「ギリシア幻想」

アレクサンドロス大王の「ヘレニズム」帝国の次に来る世界帝国は、「ローマ世界帝国」です。くり

かえして言えば、西洋史はすでに古代史のこのところで、「ヌースの文明」といわれたポリス都市国家のロジックでは全く訳が分からなくなっているけれども、古典古代文明が「明晰なヌースの文明」だなんていうのは、わたしに言わせれば、ただセンチメンタルなノスタルジアでしかありません。

この問題は、わたしの本の第Ⅲ巻の主題ですので、そこで詳しく書いています。どういうことかという、ポリス国家というのは、アテネで昔からみながその実態をよく心得ていたように、奴隷制で家父長制的な小規模なフェイス・トゥ・フェイスの政治的共同体国家ですから、このことを抜きにした古代ギリシア文明論というのは、バカバカしい「幻想」なんです。

今日の三木亘さんのお話で、その「幻想」を、みなさんが頭からすっきり振り落とししてくださるといいと思いますが、アテネ・ポリス民主主義では少なくとも成人男性だけが市民なんです。女性は市民ではありません。奴隷以下です。それは、これから話すディオニューソスに関係している重要なことなんです。

市民権が男性だけに与えられていたのが、ポリス民主主義国家です。アレクサンドロス大王の「世界帝国」みたいな「普遍国家」というものを作る原理そのものを、ポリス国家はもともと持ちあわせていないんです。アテネはいちばん大きいポリス国家ですが、その人口は20万人くらいです。ものすごく小さいんですよ。この藤沢市の人口だけでも36万人ですよ（笑）。ものごとはいつも具体的に論じなければならない。フェイス・トゥ・フェイスの社会ですね。みんな「ヤア」「ヤア」といったようなものです（笑）。そういう小さいポリス国家が、世界がどうだこうだというのは、他愛ないお伽噺です。この藤沢市が、藤沢市の中に全部世界があると言ったって、信じる者なんているはずないんですから。アテネ民主主義国家などよりもっと大規模な、地方自治体なんですよ。そういうレベルでの話です。そういう小さなポリス国家に、エーゲ海文明が入ってきます。

奴隷制の基礎というのは、小土地所有制度にあります。土地の地主さんがいるんです。耕作地主ですが、これがつまり、戦士の種になる「市民」なんですね。アテネというと、とても開かれた街のように思い勝ちですが、実は、その九割が農耕地帯です。そのアッチカ地方と呼ばれた農耕地帯で、地主さんが自耕作の農業を日々に営んでいた。一方では、アテネが、東地中海上の港町だということが、とても重要です。なぜかという、エーゲ海で海上交易をやって、無敵の世界艦隊を持っていたのが、アテネの最大の自慢の種だったんです。ですから、アテネは、片方の足をアッチカの農耕地帯に置いているんですが、地中海の覇権国家にアテネが昇り詰めていく時の前進力は、エーゲ海での海上交易に関わる方のものなんです。

海上交易ですから、そこにはまず、船を持っている「異国人」がいて、かれら「非ギリシア人」が、交易を全部取り仕切っていた。そのうちに、かれらはもっと街の中に入ってきて、今度は両替商が出てきます。「両替商」はみんな机を持っていて、その机を「バンマ」と言いますが、それが現在の銀行(bank)の語源です。「両替商」をやっているのは、「ニグロ」でした。異国人は市民権を持っていません、まして黒人＝ニグロにおいておや。つまり、市民権を持たない異国人が、こうしてアテネが生きてゆく上での命の綱である外国交易を、すべて一手に取り仕切っていた。不可思議とも言える逆説的な構造で、ポリス都市国家は成していた。

市民権は、アッチカの土地所有者である農民戦士が独り握りしめていて、絶対に手放そうとはしない。海上貿易の担い手である異国人や黒人に市民権を認めるようなことは、ポリス市民共同体国家に

とっては、絶対にありえない。だけど、奴隷制の市民共同体なのだから、それが当たり前になるとは必ずしも言えない。現に、ローマ帝国は、征服した帝国内の異国人にもどしどし「ローマ市民権」を拡大・授与しています。これが、ローマ市民共同体が「世界帝国」へと拡張していった、最大の秘密です。

アテネ・デモクラシーというのは、「戦士共同体」の市民国家であったというのが、構造的理解のためのポイントです。しかし、生活は実際には、市民権を持っていない、多くの場合には裕福な異国人や黒人に全く依存していた。そういう独特な内的矛盾を、古典古代ギリシア・ポリス都市国家は深く抱え込んでいた。それが、アテネ国家の真相なんです。このことは、この本でも詳しく書いていますが、わたしは、マルクスができなかった古代ポリス国家に対する批判的分析をここで初めてやった、と生意気に自負しているわけです。だから、マルクスの欠を補うつもりで、この本を書いたのです。なにしろ、わたしから言わせれば、マルクスはこの点では、ヘーゲル的であって、かれヘーゲルの「ギリシア幻想」を無邪気にも共にして生きている。

三木亘さんもおっしゃっていましたが、マルクスは「古代のギリシア幻想」が大好きなんです。要するに、無垢なる少年期への止みがたいノスタルジアです。その気持ちは、わたしにもよく分かる。古代ギリシアは、雨があまり降らずに、いつも明るく、彫塑的なよく見えるかたちで、燦々たる太陽の下にくっきりと浮かび上がっている文明であり、ポリスと言っても、隣り近所と言っていっくらいに、海峡の狭い空間の上に「フェイス・トゥ・フェイス」の打てば響くお国柄ですから、それに憧れたマルクスの気持ちも、よくわかります。

今でも、パルテノンを一目見れば、無垢なる人類の時代があったんだと、東西を問わずに誰しも思わずを得ないところがあります。ノスタルジーを強く感じると思います。マルクスは、かれの唯物史観なるものを、古代ギリシア社会の批判的分析には応用していませんから、本当のことをよくわかってないんですね（笑）。ディオニューソスの声を天の声として一斉に（共同体幻想として）聞き取る否や、山へかけ上がって乱痴気しながら生肉を喰らうオンナの気持ちが、チットも分からない（笑）。女の気持ちが分からなけりゃ、世界史なんて絶対に分かりません（笑）。

マルクスの「世界史論」というのは、若い時代（1848年）の『共産党宣言』からしてそうですが、「ローマ帝国」から始まります。ローマ帝国が「両階級の共倒れ」の世界史的闘争の中で、いかにして消滅していったか、というところから、世界史の全部を考え始めるんです。

これは非常に大事な視点でして、わたしたちは、現代世界においても、この「両階級の共倒れ」の中において、三木亘さんのおっしゃるように、これで「人類史は終わり」というところにまで来ているわけです。しかし、たとえば、〈パクス・アメリカナ〉の世界史的没落というかたちでイラク戦争は終わるだろう、とわたしがいくら言っても、去年は誰もそのことのリアリティを信じてくれませんでした。今はブッシュも罷めざるを得ない状況に立ちいたっているじゃないですか。そこに人類史の希望が、逆にあるわけです。しかし、〈主体〉が立たないということを、もしも前提にせざるを得ないならば、これで、人類史は本当に終わりなんです。だから、この本のタイトルである〈主体のユリシーズ〉の絶対的必要性が出てくるのです。

七年くらい前に、三木亘さんや他の仲間と一緒に、三年間くらい共同研究をやって、〈これからの世界史〉というシリーズで、十三冊の叢書を平凡社から出しました（笑）。すべていい本ばかりでしたが、全く売れませんでした（笑）。なぜ売れないかという、〈これからの世界史〉というのは、そもそも世

界史に明日はあるのかどうかということが問題なのでして、そんな面倒くさいことを考える人間は、たとえ歴史学者にしたって、今はあまり居なかったんですよ（笑）。シリーズでいちばん最後に出たのが、三木亘さんの書いた本で、先ほどもおっしゃっていた『世界史の第二ラウンドは可能か』（これからの世界史2）です。

自分たちの前途には、何の希望もチボウももうないヨ、ありえないヨ、という御詫言でから、お先真っ暗で、だれも読もうとしない（笑）。買おうとしない（笑）。わたしは、この共同研究の過程で、三木亘さんの長い、長いお話を、二回聞いていますが、今日の三木亘さんのお話なんて、ほんの短い、短い触りだけです（笑）。わたしたちが相手のときは、八時間休みなしでしゃべりまくりました（笑）。こちらもしっと我慢して聞いていなければならぬわけですが（笑）、八時間を二回ですよ。ほんとに恐れ入っちゃったね、メモ一枚なしで、十六時間ぶっ通し（笑）。わたしにとって、高校の同級生の三木亘さんが、どれだけの学殖の持ち主かということは、さっきのお話でも、みなさんもよくおわかりのことと思いますが、三木亘さんは、わたしに言わせれば、世界有数のイスラーム学者です。けれども、日本であまりその名が聞こえないのは、論文を全部英語で書かれているからなんです。とにかく、メモ一枚なしでとうとうと十六時間話し続けられるのですから、恐れ入るほかない（笑）。だから、今日のお話なんて、ホンの簡単に短い触りにしか過ぎない、ということをおし上げておきたいのです（笑）。

三木亘さんが、なぜ『世界史の第二ラウンドは可能か』なんていう、非常識な題名（笑）をつけたかという、それは「第一ラウンドは終わった」という共通の括りがわたしたちに出来ていて、「第二ラウンドはもう無いんだ」というのが、三木亘さんが本当に言いたいことだからです。だから、あれは売れなかったでしょ（笑）。さっきも言ったように、誰も買わないんですよ（笑）。シリーズ名は〈これからの世界史〉だけれども、明日はないんだ、第二ラウンドはもう無いんだという、お先真っ暗な物語だから。平凡社もやる気が出ないから、それで、平凡社シリーズは終わりにになりましたが、中身はとてもいい叢書なんだけどなあ（笑）。

ついでに自己宣伝しておきます。わたし自身が担当した巻は、『「日本」の原型—外ヶ浜から鬼ヶ島まで』という本で、これもとてもいい本だったんだがなあ（笑）。三木亘さんの本のとんだ飛ばっちりをすっかりくらってしまって（笑）、いいだももの珍説によると、原日本の北の端は「外ヶ浜」という、ウソという名の鳥が鳴いている砂浜だったところで、それからがインコグニタの未知の土地だったというのも薄気味悪いが、そのことをよく知っている鳥が鳴いているのですからまだよいが、それもどうやらウソくさい（笑）。そして、南の端には、「鬼」の出てくる嶋の話だというんで（笑）、このいいだももという男、ひよっとすると、「日本」そのものを、この北の「外の浜」と「鬼が嶋」との間で、沈没させてしまうコンタンか、とすっかり見透されてしまって（笑）、しょうがないのかもしれないね。わたしの本心から言えば、「原日本」が実際に沈没して亡んでしまえばいい、と昔も今も内心では思っているんですから（笑）。

いま世の中でしきりに論じられていることなんか、十年前のわたしたちの共同研究会でとっくに全部論じつくされているんですから、何もかもそこで語られ尽くされている先の話が実際に1994年にわかるわけですから、あの頃あれがベストセラーになっていたらなあ（笑）と、苦労して創った者としてはつくづく思いますね。マァ、わたしたちに言わせていただければ、歴史を理解するのにぜひ必要なものは、わたしたちの秀抜きわまりない（笑）頭脳のひねりだした種明かしですよ。ウソとオニとの間に挟まれた薄いハムの一切れみたいなものなんです（笑）。そういう、三木亘さんのような歴史観を、改め

てまた考えてみる必要が、今あります。

## 7 吉田健一の世界観

もう一つは、今日申し上げたいのは、わたしの死んだ友人の吉田健一の話です。吉田健一は、吉田茂の長男ですけれども、わたしは、かれとは文学仲間で、戦争中からの飲み友達でよく知っています。名だたる自民党総裁・首相の吉田茂は、わたしはもちろん嫌いですが、長男の健一は、それはそれは破天荒なすばらしい男でした。紅茶の話なんか書いていて、お好きな方も多と思いますが、後年はだんだん練れてきて、非常に蘊蓄のある、まろやかななかにも深みのある話を幾つも書いた。

三木亘さんと同じで、学殖抜群な大学者です。かれは、ほとんどをイギリスで暮らした人ですから、英語ぺらぺら、紅茶、ブドウ酒サラサラの、向こうの大教養人なんです。彼は向こうでは、たいへんハッピーでした。それが戦時中の日本に帰らされてきて、わたしの飲み友達になった。

さっき三木亘さんがおっしゃったように、ヨーロッパが文明的になったのは、やっと 18 世紀になってからです。今日の日本では、浜林正夫さんがイギリス史についての最高権威ですが、代々木派に属しておられます。わたしたちの例の〈これからの世界史〉の共同研究の集まりに、お呼びしたら、ありがたいことに来てくださって、そのお話をお聞きしたことがあります。そのときにわたしは忌憚のない質問をさせていただいて、イギリスはいつ頃からいったい近代化したんですか、と聞いたら、ナントナントそれは 18 世紀からだ、と浜林正夫さんはおっしゃるんです。わたしはすっかりびっくりしてしまって、14 世紀あたりか、とわたしなんかは思っていたと言うと、そのころはまだ戦争の時代です、と浜林先生はシャラツとしていらっしゃる（笑）。そして見せてくださったのが、三木亘さんも挙げておられた、吉田健一の「ヨーロッパ史観（『ヨオロッパの世紀末』）」なんですよ。

14 世紀というと、ヨーロッパは戦争ばかりしていました。三十年戦争では、ドイツなんか人っ子一人いなくなりました。そのあとにやっと、「ウェストファリア条約」ができて、それからヨーロッパ大陸から〈近代〉が始まるんですね。それまでは、戦争、戦争でお互いを殺しつくしていた。当時のヒトラーが何人も居て、とにかく殺しあいになるのがメシよりも好きなのだ、ヨーロッパ人というのは（笑）。それでは両方とも全部滅んでしまうというので（笑）、「ウェストファリア」でやっと和解をし、ヨーロッパ大陸で生きてゆくルールをお互いに取り決めた。それでやっと、「デモクラシー」と今日いわれている平和な時代になった。ホントですよ、みなさん、キツネにつままれたような顔をしておられますが（笑）。

ですから、これまた、三木亘さんがおっしゃったように、「国際法」というのは、戦争のルールを決めたことが始まりなんですね。それが「平和のルール」の大元になる。この前後関係は、ゼツタイに逆にはならない。「ウェストファリア条約」以後は、ルールを決めて戦争をやろうじゃないか、ということになったんです。それだけ、と言ってよいのです（笑）が、それ一つだけでもヨーロッパとしてはタイヘンな進歩です。殺し合い好きのヨーロッパ人としては（笑）。未開民族にもよくある戦闘行為の「儀礼化」ですね。わたしに言わせれば、それはグロティウスの「海洋法」の陸上への適用なんですよ。

グロティウスの「国際法」が、どこで適用になるかということ、かれは陸地を越えてルールをつくった。海は、主権国家というものを作らない。作りようがない、なにしろ波の上だから（笑）。海というのは、

それ自体がどこまでも陸の国境なしの「世界」だからです。グロティウスは、「海の自由」、「航行の自由」ということを言った。

日本ではそんなことは当たり前で、林子平という男がとっくの昔に居て、両国の下の水はずっと行くと、ロンドンのテムズ川まで続いている、と書いて、徳川幕府期の鎖国時代でしたから、それが、お上の怒りに触れて発禁になってしまって、版木も召し上げられてしまった。『開国始末』という本ですが、これは国を開いてゆく始末書きとしては、当然の世界観です。グロティウスと同じですよ。

グロティウスになって、「航行の自由」ということが言われ出して、世界が初めて自由になった。そうやって、戦争と平和の掟が、だんだんとグローバルなものになって、こんにちの「国際法」になってきた。そういう歴史を辿ってきている。わたしのポン友の吉田健一という人は、イギリス仕込みのそういうことがよくわかっていたんです。

戦後直後、日本橋の橋の上にべたっと座って、「右や左の旦那様」とやっていた吉田健一について、そういうことを書いた人が居ないということが、わたしには不思議なんです、かれが戦後いかに解放されたかということですよ。当時すでに二十歳の徴兵適齢期にあったわたし自身も、戦争が終わって、とても解放感を感じて、すぐ『世代』という学生さんの文化運動を始めましたが、その解放感がほとぼしるんです。日本橋の上で乞食をやっていたかれには、とてもとても、わたしなんかは及びもつかなかった（笑）。

吉田首相に、おたくのご長男、日本橋で乞食やっていますよ、と言うわけにもいかず、それをどういうふうにしたかの政府が收拾したか、わたしもよく覚えていないんですが、わたしが、戦争中に疎開した河上徹太郎が打ちちゃった「文学界」の揃いを全部貰い受けて、一高の国文学会の部室に収容していたのです。戦後、かれ吉田健一がやっていた文学研究の必要があって、それを吉田健坊が借りに来たりしているうちに、かれもだんだんまともになって（笑）文人に戻っていった。

吉田健一は、ヨーロッパの文化を本当にかいくぐって自分の世界観をかたちづかった。たとえば、紅茶の飲み方ですが、お皿にこぼして飲むやり方が、どういうイギリスの女性の習慣から来ているのか、吉田健一の身にも付いているわけです。そういうふうに、自分に身に付いたところから考えるべきだろうと思います。わたしは勿体ないから、紅茶をわざわざ茶碗皿にこぼしたりすることは、絶対にしませんからね（笑）。いつまでたっても文化人になれない（笑）

今日、三木亘さんから改めて教えていただいたことを、三つの点から補足してお話しいたしましたが、そういうことを頭に入れて、また、わたしの三部作を読んでいただければ、と思います。ちょうど時間になりましたので、これで終わります。

## 全体討論

猪野 どうもありがとうございました。わたしのほうから、ひとこと、質問を差し上げて、休憩を挟んで討論に移りたいと思います。いいださんのこの3部作に関して、三木さんが今日どうして「世界史の中におけるギリシア幻想」というタイトルでお話しくくださったのか、その理由をお聞かせいただきたい

思います。

三木 渡辺金一さんという一橋大学の先生で、しばらく前までは東ローマ（ビザンチン）帝国の研究を日本でただひとり国際レベルでやっていた人がおりますが、かれもわたしの考えには大賛成です。上原専禄さんのお弟子さんで、わたしよりも2つ3つ年上ですが、かれも若いときからリュックを担いで地中海あたりを歩き回っていて、実際のギリシア、東ローマの人々の暮らしやものの考え方、感じ方をよく知っています。

古代オリエント文明、ギリシア・ローマ文明、中世ヨーロッパ文明、近代ヨーロッパ文明という系譜は、19世紀産業革命以後の英独仏のヨーロッパ人が発明した世界史の理論です。そのヨーロッパが世界の覇権を握ったものですから、いつしか世界中がそれを普遍的な世界史理論として受け入れるようになってしまったわけです。日本の場合は、明治維新以後の世界史に当たるものは、ギボンだとかスウィントンだとか、ほとんどヨーロッパ人の書いたそういう理論の上に立ったもので、ヨーロッパの研究の先端をパクってきて、それをもっともらしそうに表現するのが西洋史学科の仕事だった。それは日本だけじゃなくて、世界中みんなそうだったと思います。

わたしがそういうことに気がついたのは、やはり高校の教師を長年やっておりまして、世界史なるものを自己流で教えていたからだと思います。教えているうちに、なんかおかしいんじゃないかと思いついて、アルプス・ピレネー以北のヨーロッパは、古代ギリシアの文献なども18世紀ごろまではおよそ知らない。そのことから、19世紀のヨーロッパ人が世界史を偽造したと考えるようになったわけです。

先ほどの話の終わりごろに申し上げましたが、エディンバラ大学のモンゴメリ・ウィリアム・ワットさんの『地中海世界のイスラム』という本をご覧になれば一目瞭然です。12~13世紀頃のアラビア語からラテン語への翻訳が、ほとんどあらゆる学問の分野で行われて、それがベースになって、そのあと2、3世紀かかって、やっとその上にヨーロッパ独自のものが出せるようになった。それが産業革命、フランス革命のころです。それが実際の歴史の事実なんです。

ヨーロッパ人がそこで世界史を偽造したこと、それをひっくり返すことが、自分の仕事の中でも重要なのではないかと、ある時期から自覚的になっていったわけです。

いいだ いま、三木亘さんが、ビザンチン帝国の問題を出してくださったので、非常によかったと思います。ビザンチンのことは、わたしの本にも沢山出ていますが、今日はお話しませんでした。要するに、ビザンチン帝国の問題というのは、「世界帝国」の概念に直して言いますと、「東ローマ帝国」の問題なんです。

わたしはマルクスの徒ですが、先ほども言いましたように、マルクス哲学の根幹は、ローマ世界帝国が両階級の闘争によって共倒れしてしまった、というところから、共倒れにならないような階級闘争におけるヘゲモニーは、世界のプロレタリアートに集約させる以外はないというところに、ポイントがあるわけです。その大筋において、わたしは今でも、マルクスを拳々服膺して（笑）やってきているわけです。



しかし、これは、マルクスの当時の知見の弱いところを含んでおりまして、マルクスがここで「ローマ帝国の没落」と言っている問題は、ギボンに倣っているわけです。ですがもっと歴史的事実に即して限定して言うと、それは「西ローマ帝国の没落」なんです。「西ローマ帝国」は、ゲルマン人オドアケルにローマを占領されて終わるんですが、ローマが占領されても、コンスタンチノーブルは占領されたわけではないんですから、マルクスが「西ローマ帝国の没落」でもって階級闘争論を組み立てたのは、大筋は外してはいないけれども、グローバルな普遍性としては、大きな欠落がある、片手落ちである、というのが、わたしの結論なんです。

「東ローマ帝国」は、三木さんもおっしゃったように、そのあとコンスタンチノーブルを中心に六百年続くわけですから、西ローマが高級で、東ローマ帝国は低級だ、というようなことは全く無いんです。逆に、東ローマ帝国が、西ローマ帝国よりも文明的にずっと高級だからローマの滅亡後も六百年間も持ったわけです。西ローマ帝国なんていうのは、フランスの内陸閉鎖型の固陋きわまる農耕国に、プラスしてけったいなキリスト教会秩序をか掛け合わせたものです。ロクなものじゃありませんよ（笑）。

先ほどの地中海世界論で言うと、地中海世界は西寄りではなくて、東寄りの文明の活力なんです。ですから、宗教的に言うと、最終的には、ギリシア正教に行くわけです。

三木亘さんの言うように、西洋は、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教の三教の複合で終わるわけですが、ツァーリスト・ロシアみたいなものを理解するためには、「ギリシア正教」の問題を抜きにしては、語れないでしょう？ 「ギリシア正教」は、単に宗教の一分派ではなくて、世界帝国論として、西ローマが滅びたあとに、「第三帝国」という考え方が周知のように出て来る。それは、ツァーリスト・ロシア、それからトルコなんです。それを悪く運用したのが、ヒットラーの「第三帝国論」になるわけです。

「第三帝国」、つまり、西ローマ帝国が滅びたあとの世界帝国、ポリス国家とか資本制国家というように国家主義的には集約できないものをどうするのか、という問題は、わたしたちは現在まで引きずっています。〈パクス・アメリカナ〉、〈ドル・核世界帝国〉というかたちでやっているのが、今ではブッシュのイラク戦争になっているわけですから。それは、またもとの国民国家に戻ればいい、というわけには、2010年以降はなりませんから。何らかのかたちで、わたしたちは戻るところが無くなってしまっているわけですから、その時どうするのかということをそろそろ考えなくてはならない。つまり、普遍的な世界帝国構造をどうするのか、ということ、考えざるを得ないんです、この今は。

現在の問題に引き直して言えば、それは、資本制世界経済というものを、イマニュエル・ウォーラーシュタイン学説として一度くぐらせたうえで、古代の世界帝国にはどういう普遍的可能性があるのかというのが、わたしの1960年代からの長い課題なんです。それには、ビザンチン帝国の問題を落とすわけにはいかない。ビザンチン帝国を滅ぼしたのは、言うまでもなくイスラーム文明なんです。そういうふうに考えれば、現在のイスラーム復興運動からもたらされている世界観的確執の問題には、深い世界史的根拠があり、たまたま近頃俄かにヒョイと出てきたものではないことが、よくわかると思います。それを付け足しておきます。

猪野 ありがとうございます。5分ほど休憩いたします。

(途中休憩)

今日はできるだけ多くの方に発言をしていただいで、講師の方に手短かに答えていただいきたいと思います。私のほうから指名することはありませんので、自由をお願いいたします。

金子務 金子です。両先生のお話をたいへん面白くお聞きしました。

いわゆる世界史という概念をヨーロッパ人が考えるようになったのは、私は第一次世界大戦を契機としてだろうと思うんですが、それをお二人はどうお考えになるか、お聞きしたいと思います。つまり、H.G.ウェルズという有名なSF作家が『世界史概観』なんていう本を書いたのも第一次世界大戦のあとですし、新渡戸稲造が国際連盟の中にユネスコの前身になる知的交流委員会というのをつくって、その事務局長になりました。ご存じのとおり、新渡戸稲造は国際連盟事務局次長で、その知的交流委員会にはマリー・キュリーやアインシュタイン、さらにはギルバート・マレー、ベルクソンなど錚々たる知識人たちが入っていて、そこで絶えず話題になっていたのが、シュペングラーの書いた『西欧の没落』のことと、これからは東洋だという話でした。

それから、H.G.ウェルズが書いた『世界史概観』の冒頭に日本のことが出てくるんです。火星のごとく遠くにある極東の国、日本の艦船が、日章旗を付けて地中海を遊弋している、という書き方をされている。つまり、アジアの果ての火星のごとく遠くにある日本という国の軍艦が、自分たちの中庭だと思っていた地中海を走航しているということに、ヨーロッパ人が動転して、世界観が変わる。そうして世界史という概念を自覚せざるを得なくなった、とわたしは思うのですが、その点をどう思われるでしょうか。

もう一つ、キリスト教とギリシア神話は、非常に折り合いが悪いですね？ キリスト教にとってギリシア神話の神様はだいたい異端ですから、抹殺していますし、ほとんど入っていません。ところが、ぼくは先年アテネに行ったときに、世界遺産に指定されている「ダフネ教会」というところを訪ねました。ダフネというのはギリシア神話に出てくるニンフのダフネです。ご存じかもしれませんが、アポロンがダフネに恋慕した。アポロンはゼウスと同じで多情多恨ですから、ダフネを追いかけて自分のものにしようとした。しかしそれを嫌ったダフネは逃げ回って、最後には、自分の父である河の神に頼んで、月桂樹になってしまう。そのダフネの名前が教会に付いていて、向こうの人にも聞いてみたら、これは非常にまれなケースだと言っていました。

要するに、先ほどビザンチン帝国の話が出てきましたが、ビザンチン帝国というのはギリシア的な要素を持ったキリスト教文明ですよ。それが今のトルコ領、小アジアのほうにできてくるわけですが、ギリシア的なものが、キリスト教的なものの中に、どういうふうに取り込まれたがために、西ローマ帝国とは違ってビザンチン帝国は生き長らえたと言えるのか、言えないのか、ということ、いいだ先生にお伺いしたいと思います。

三澤昭 三澤と言います。非常に初歩的な質問ですが、私は若いころは歴史というものには興味がなかったんです。なぜかというと、歴史書というのは、だいたい勝った国が自分の国の都合のいいように書くものだと思っていましたから。ある年、仕事の関係でパキスタンや中国に何回か行くことがあった

んですが、その時に思ったことですが、なぜ、三大文明と言われたような優れた文明が存在した国々が滅んでしまったのか、よく解らなかつたんです。ああいう古代文明の栄えたところには、いろいろな文化があるわけですね。その食文化やら宗教やらが、いわゆるヨーロッパに伝わっていった。先生のお話によると、当時は後進国だったヨーロッパの諸国は、それらの文明から、知識と技術の恩恵を受けて発展してきた筈なのに、尊敬もされず、かつての文明の栄えた国が、エジプトもそうですし、インド、パキスタンもそうですし、中国もそうですが、一時的にヨーロッパの国の植民地になった。イラン、イラクあたりも、昔は植民地だったし、今でも、いろんな意味で虐げられている。昔は文化が発達している国だったはずなのに、どうしてだめになったのか、ヨーロッパに蹂躪されているのか、解らないのですが、そこを教えてください。

猪野 お二人のご質問に手短かに答えていただいて、次の質問に移りたいと思います。

いいだ 金子務さんから、二つのご質問をいただきましたが、金子務さんは、ものすごく学識のある方ですから、わたしとしては、非常に悠長な、間延びのしたことしか答えられないのですが、最初の、ヨーロッパ人にとっての世界史意識というものが、いつ、どういうことを考えて設定されたのか、ということですが、金子務さんは、それは第一次世界大戦以後であろう、と言われましたが、わたしも全く同様に考えています。

もう少し敷衍して言いますと、これはつまり、20世紀的現代史の中心問題ですから、或る意味では、世界史意識がヨーロッパ人ならびにその影響下にあるわたしたちに出てきたのは、同時代意識であり、現代意識である、という側面を色濃く持っていると思います。そのときのモメントは、金子務さんがおっしゃったように、オズワルド・シュペングラーの『西欧の没落』だと思っんです。

シュペングラーについては、その後もいろいろコメントが出されていますが、わたしは相変わらず非常に高く買っています。ヨーロッパでは、『西洋の没落』ブームが去ったあとは、シュペングラーという素人の歴史家に対しては、比較的批判的な意見の学者が多いんですが、学者の言うことはあまり当てになりません（笑）。なにしろ、自分だけの狭い業界の都合のことばかりを言うのですから（笑）、西欧人は「西欧の没落」のことを、シュペングラーのように、朝から晩まで考えることに、とても堪えられないですよ（笑）。なにしろ自分が没落するヨ、という気味の悪い話ですからね（笑）。

シュペングラーというのは、マァ、そういう意味では「雑学者」なんですが、かれの有名な「有機体説」というのは、先ほど三木亘さんがいみじくも触れられた、イブン・ハルドゥーン「生物モデル」と同じことです。「生物有機体モデル」で世界史を考えるとすることは、「無機物モデル」とは違って、成長して、衰弱して、滅びるという、有機体の栄枯盛衰を歴史に当てはめますから、その長所は、栄枯盛衰というものが、有機体的循環として、歴史に入ってくることだ、と思います。わたしは、イブン・ハルドゥーンの本『歴史の研究』を何度読んだかわからないほどですが、現在はコンパクトに岩波文庫に入っていますから、みなさんもぜひご一読ください。

オズワルド・シュペングラーの『西欧の没落』が、第一次世界大戦直後の「荒地」と化した大地に住んでいるヨーロッパ人に熱狂的に読まれた、必ずしも歓迎されたわけではないけれどもよく読まれたと

というのは、ひとえに第一次世界大戦がもたらした西欧の荒地（ウェスト・ランド）化のせいなのでして、それが読まれざるを得ないから読まれたということは、第一次世界大戦でヨーロッパ自体が戦場になって、今言ったいわゆるウェスト・ランド（荒地）化した、ということが、やはり決定的だとわたしは強く思います。

自分が作った文明が、その絶頂のところで「荒地」化してしまったんですから、どうしてもそこにヨーロッパの歴史的な没落意識が起きてこざるをえない。これも一種の「自滅」であるわけですね。「自業自得」と言ったらいいかな（笑）。これは、世界史の「同時代的な意識」なんだけれども、特にそのことがアクセントが付いて尖鋭化したのは、自分の没落の自己探求が必然化したからだ、とわたしは思うんです。

ですから、H.G.ウェルズの『世界史概観』が当時出たということは、かなりまだオブティミスティックなところがあると思いますが、これもやはり危機における文明の再考意識の一種であったというふうに、大雑把には言えると思います。

二つ目のご質問ですが、金子務さんは、キリスト教と古代ギリシア神話（三木亘さんの言われる「ギリシアの幻想」を含めた「ギリシア神話」との着きが必ずしもよくないということ、珍しい例として「ダフネ教会」のことをおっしゃいましたが、わたしは、ビザンチン文明というのは、西ローマ帝国よりも強力に生き延びた、地中海世界の東の方の偉大な文明であって、その基軸は「ギリシア正教」ですから、ギリシアとは着きが悪いどころか、「ギリシア」と「キリスト教」との文明的混和・混淆で歴史的な生命力を持っている、とかねてから思いますから、これは着きをよくしたほうの好例と言える、と思います。

もう一つの事例として、挙げられるのは、中世ヨーロッパにおけるキリスト教世界の統合のことです。前半と後半で、キリスト教世界を統合するイデオロギーは、若干違ってはいますが、前半には、アウグスティヌスの神学を軸にして、キリスト教世界を統合したときに取り入れたのが、プラトニズムなんです。ネオ・プラトニズムです。世俗世界のことは言えないので、形而上学的・神学的にだけ天上世界を統合するわけにはいきませんから、アウグスティヌスは、プラトニズムを取り入れたんだ、と思うんです。ネオ・プラトニズムとアウグスティヌス神学とが習合関係にあるというのは、非常に大きなことです。それは、或る意味で、キリスト教神学の要のところで、ギリシア哲学・ギリシア神話とが入った習合形態なわけですから、それはやはり文明的に大交合であった、と考えられます。

後半は、神学的にはトマス・アクィナスなんです。アクィナスがその時くつついたのは、かれ自身の選択ですが、「アリストテレス哲学」なんです。ギリシア哲学というのは、わたしの本でも書いておりますように、プラトニズムが古代ギリシア哲学を横奪したインチキ哲学でして、なにしろ、ニーチェの言うソクラテス以後の墮落形態ですから、それ自体が歴史の贗造なのであって、そのプラトニズム的な偽造のポイントは、タレス以来の〈ミレトス派自然哲学〉の排除・没却であるわけですが、それにしても、アリストテレス哲学は、腹のなかでは、師匠のプラトニズムのイデオロギイについては、それこそ片腹痛く思っていますから、かれの「フュジカ」＝「自然学」で、完全にプラトンが排除・追放したタレス以来の「ミレトス派自然哲学」を、完全に復権させてしまった。その自然学＝フュジカと「メタ・タ・フュジカ」つまり「形而上学」とてアマルガンしたのが「アリストテレス哲学」であるので、それとトマス・アクィナス神学とが、中世ヨーロッパの後期にくつついて、高級なイデオロギイで統一した習合がなされた。このように、近代へと転形してゆく時が近づいてくると、オッカムの「ノミナリ

ズム（唯名論）」が出てきて、「オッカムの剃刀」で切断が入るんだらう、とわたしは思います。これで、近代哲学の普遍的イデオロギーの歴史的大前提が出揃ったわけです。

プラトン、アリストテレスの哲学と、アウグスティヌス、アキナスの神学とのあいだに、習合的結合関係があった。むしろそうした習合的結合関係のほうが、中世世界では全統合的なイデオロギーとして作用したのではないか、と思うわけです。とにかく、この習合で世界史の古代と中世とが不可分に結合して、近代世界の思想的な大前提が出来上がるわけです。付け加えますと、そのことを可能にした力というのは、西ローマ帝国の没落、ルネッサンスという周知の歴史過程において、一度滅びた古代ギリシア文明を、古典性と幻想性とをともに含めたかたちで保存した「アラブ世界」であった、ということが大事なところですよ。

ここで「三木亘史観」がもののみごとに生きてくるわけですが、やはり 30 度線というのは歴史の本道であり、ピレネー以南でヨーロッパを区切れば、ヨーロッパは地中海世界に属する。そして、地中海世界における伝統は、まさに「アラブ」ですから、アラブと一緒にあったギリシア、というかたちの中で、アラブがずっとプラトン・アリストテレス哲学を保存した。特にアリストテレス体系の保存の方はそうですが、そのことの世界思想史的寄与は絶大なものです。ですから、後にルネッサンスで蘇ってきた「アリストテレス主義」というのは、「アラブ化したアリストテレス」なんです。これはとても大事な点ですよ。

アラブの学識というのは、単にアラブ的に訛ったというのではなくて、先ほど三木亘さんが二人のアラブ学者の名前を挙げられましたが、そのアラブ学者たちの古典古代的なアリストテレス哲学のエッセンスの保存のしかた、時代の新機軸を出したその思考法に、類い稀なものがありますから、アラブ経由でもって、ヨーロッパ中世におけるギリシア思想とキリスト教思想の統合が可能になった、と総括できるだらう、と思います。

金子 ギリシア的思想とキリスト教的思想の癒着の問題というのは、今、いいだ先生が説明してくださいとおりでありますが、私が言いたいのは、ギリシア神話的なもの、つまり民衆のあいだで広まっているいろいろな信仰があって、例えばデルフォイの神託もそうですが、そういうものがキリスト教が入ってきてから没落していくわけです。神託は許されないと言って。そういったところで、非常に相性が悪い。

確かに、アウグスティヌスのプラトニズムであるとか、トマス・アキナスのアリストテリズムであるとかは、むしろ今まで巷談哲学の中でも言われてきたことですし、正統的な解釈としても、12 世紀ルネッサンスにヨーロッパが、トレドとかパレルモとかイスタンブールでもって、イスラーム思想を介してギリシア的思想あるいはギリシアの文献を再発掘していくということは、ここ 20 年くらいやられてきているわけです。

そういうことはあるにしても、いいだ先生もおっしゃっていたダ・ヴィンチ・コードでも話題になっている問題は、キリスト教文明に抹殺されたものの中にはかなり深い豊かなものがあったのではないかとことです。例えば地母神の信仰ですとか。そういったものの中からギリシア神話だって出てきているわけですから、いろんな問題に全部関係があるわけで、そういうものが全部キリスト教文明の中で消されていった、あるいは非常に整理されてしまったという問題について、ダ・ヴィンチ・コードの話

に触れて喚起しておいたほうがいいんじゃないかなというふうに思ったものですから、申し上げました。

いいだ いま金子務さんのおっしゃったことに、まったく異論は、わたしとしては無いのですが、それに便乗して、少し補足させていただきますと、中世のキリスト教のイデオロギー支配で、或る意味では隠匿されるし、抹殺されるし、真っ白に漂白されてしまうなかで、キリスト教イ

デオロギーに染め抜かれなくて、差し当たりは、そこからはみ出るかたちで、深いものを、民衆が「ダ・ヴィンチ・コード」的に代々保持している。イエスは人間であって、マグダラのマリアがそのかみさんで、二人はどこかに移り住んで幸福に暮らしましたトサ、というレジェンドが続く。そういう問題が一つある、と思います。

もう一つ、やはりわたしが、この 8000 年の歴史叙述の中でいちばん強調して書いておりますように、「古代ギリシアの幻想」が出てくる以前に、ミノア・ミュケーナイ文明の 6000 年というのが在ったわけです。そこは「母系社会」ですから、どうしたって、その神様は女の神様で、地母神または海母神だった、と思うんです。そういった女神たちはいったい、古典古代ギリシア文明の「ヌースの制覇」とともに、どこへ行ってしまったのか。古代ヨーロッパ文明も、もともとは母権制で女神の世界ですから、地中海だけでなく、はるかに古いプレ文明は全部、地母神、女神信仰です。その問題は、わたしはとても大事なことだと思います。

古代日本で言えば、伊勢神宮の天照女神信仰の問題です。それも女神礼拝と太陽仰礼拝とのアマルガムです。毎朝、柏手をバンバンバンと三度打つ（笑）。

それから、三澤昭さんがご質問のなかで非常にポイントを突いた問題を、出されましたが、わたしたちは、西暦で数えての 2006 年にいま住んでおりますが、ちょっと歴史の尺度を変えたと、明治維新以来のヨーロッパから輸入された近代化過程の中で、もちろんのこと利口になった面も、開けた面も、あるけれども、同時にそうした「文明開化」の中で失ってしまった面も当然あるわけです。それは、三澤昭さんの言い方で言えば、そういう古い文明が幾つも在って、しかも、それがかつては非常に栄えたのに、ヨーロッパ文明に続く世界植民地化の中で全部滅ぼされてしまった、という大問題です。

事実確認は、三澤昭さんのおっしゃる通りですが、それはなぜなのか、とその原因を問われると、わたしも簡単には答えられませんが、「ヨーロッパ文明」というのは、根本の性格において、「戦争の文明」、「殺戮の文明」である、ということが言えます。

それはけっして、並大抵の殺戮ではない。ヒトラー・ナチズムのファシズムというのは、ヨーロッパの歴史の「鬼っ子」ではけっして無くて、わたしは、あれはヨーロッパ文明の正嫡だと思っています。本当の秘訣だと考えれば、やはり、「アウシュヴィッツの問題」に行き着きます。「アウシュヴィッツ」は、ユダヤ人の完全な大量虐殺、ジェノサイドですからね。

だから、わたしは、ヨーロッパ文明の世界支配のイデオロギーというのは、「ジェノサイド」だ、と強く思います。ユダヤ人というかたちで、ヒトラー的な変称で勝利をたまたま得た場合には、非常に奇形的で奇妙に見えるけれども、イラク戦争のやり方なんかを見ていると、やはり「ジェノサイド文明」なんじゃないですかね。そして、それについて、いまだに何の痛みも反省も感じないというのは、ブッシュは単に西部のカウボーイ式に暗愚・愚鈍・偏見そのものなだけでなく、非常に卑劣きわまりな

い西洋文明人なんだ、と思いますよ。わたしは本当に、あの人たちは「人類の敵」だ、と本気で思って憎んでいますから、それにべったりと追随している小泉純一郎なんかも、そいつらのサンチョ・パンサだと思っから、激烈に大嫌いなんですけど（笑）。

「ヨーロッパ文明」がそういうふうになるのは、基本的にそれが「ジェノサイド思想の文明」だからなんだ、と思います。わたしたちは、かれらから、「基本的人権」も「民主主義」も教わったし、「科学・技術」も教わったし、いろんな美味しいものも知りましたが、そういうものを頭から否定するのではなく、かれらが人類文明史に貢献した面を認めることにわたしはやぶさかでは全くありませんが、基本的には「大量殺戮」に価値意識をもった得意満面の「高慢文明」なのではないのか、と強く今でも思っています。人類文明史の観点からみると、この〈近代〉の五世紀間は、最悪な五世紀間だった、と強く思っています。

三木 今のいいださんの話に続けて、三澤さんのおっしゃった問題に対する考えを申し述べます。これは今日お配りしたプリントのどこかに書いてありますが、マクロに申しまして、18世紀までは世界は商業社会でした。商業社会というのは、ウィン・ウィンでお互いに得をする社会です。しかし、産業革命以降は商品化社会、別な言い方で工業社会です。これは、不特定多数に対して商品を売りつける。大量生産すれば、その原料を暴力的に買いつけるという、ひどく攻撃的な経済のあり方が、いわゆる産業革命以後、いまに至るまで展開しているわけです。これは、ウィン・ウィンの有無相通じてお互いに得するんじゃなくて、どこかが豊かになって、どこかを貧乏にする。

大雑把に言って、世界における商業のあり方が、いわゆる先進国がいつも買い手市場であり、同時に工業生産物に関しては売り手市場であると。不均衡なんです。どちらも先進国が得をし、後進国が損をする。客観的には世界的に搾取が行われている。それで、かつて非常に文明の栄えた地域の人たちが貧乏にさせられていった。今もさせられている。第二次世界大戦後のアジア・アフリカ・ラテンアメリカの解放運動は、それに対する抵抗であって、いまだ課題は果たし終わっていない。

いわゆる産業革命が起こった1800年ごろの、ヨーロッパと中東の人口の都市化率を、プリンストン大学の教授だったレバノン系キリスト教徒のイーサウィさんが調べていたのを、むかし読んだ記憶がありますが、中東の都市化率が人口の10%程度、ヨーロッパが7%程度で、中東のほうがより都市化した豊かな商業社会だった。

ハミルトン・ギブさんがどこかに書いたことですが、17世紀ごろまでは、オスマン帝国に境を接しているウィーンを都としたハプスブルグ帝国では、ヨーロッパ人キリスト教徒の住民がオスマン帝国へ移住することが非常に多かった。オスマン帝国のほうが文明度が高いので、住み心地がよかったわけです。

近代以前の世界の地域の中で一番豊かだったのは、わたしはインドだと思います。あるいはインドと東南アジアです。生態学的条件も世界でズバ抜けていいんです。古代から18世紀ごろまでは、地域間貿易などは工業社会、商品化社会とは違った意味で不均衡でした。なぜかという、インド東南アジア方面はとにかく豊かなので、西の古代ローマ帝国のインド洋方面との貿易はつねに入超で、プトレマイオスがどこかに書いていますが、5000万セステルティくらい赤字になって、けっきょく貨幣で支払うしかない。

それから、中世くらいになると、胡椒をはじめとする香辛料貿易が始まりますが、これも当然西の方が入超です。そのころヨーロッパが輸出できるものは毛織物くらいで、そんなものをインドに持っていても誰も買いませんから、どうしたかという、アウグスブルクの近所に銀の鉱山が開発されたので、けっきょく銀で支払ったわけです。インドから東の方は貨幣は銀本位ですから。

これは別にインド方面が搾取したわけではなく、とにかくヨーロッパがあまりに貧しくて、インド方面から輸入したいものがいっぱいあるから、結果的にそうなっただけです。それに対する反撃が、16世紀にコロンブス以降に起きるわけですが、それはエマニエル・トッドさんがどこかで書いていますが、失敗します。それでヨーロッパでは、改めて植民地化やもっと暴力的手段を使うことによって巻き返していく。それから産業革命以後のあり方になっていくわけです。

三澤さんの問題に関して、わたしはそう考えます。

それから、金子さんのいわれた、キリスト教以前のギリシアの神々や守護神の問題ですが、18世紀以後にヨーロッパが古代ギリシアを問題にするようになったのは、古代ギリシア思想は科学思想のもとであるという考えからです。

ところが、金子さんもたぶんよくご存じの科学史家の村上陽一郎さんが紹介していますが、コペルニクスの理論も、ケプラーの理論もニュートンのプリンピキアでさえ、みんな神学理論であるというのが、今のヨーロッパの科学史の認識のようです。いわばキリスト教が科学理論を生み出したということです。従来のヨーロッパ史だと、キリスト教が科学を弾圧したという理解が多かったわけですが、村上さんが紹介している話は、むしろ神学理論がけっきょくは一種の科学理論として受け入れられたとしている。

それから、ギリシアの地母神に関しては、一つには、ヨーロッパキリスト教の地域では地母神信仰がマリア崇拝に化けたということがあると思います。中東のキリスト教は、インド洋貿易の中心である南インド南端西岸のケーララにも非常に早い時期から広まっていますが、ケーララにいくと、マリア像がいたるところにあります。これはもともとは中東を中心とした地母神信仰の一種の変換形態だと思えます。

地母神に限らず、地中海にしても中東にしてもいろいろな神々があつたわけで、それに対してキリスト教もイスラーム教も、言ってみれば上から降りかかっていったという面があります。キリスト教に関して言えば、一番はっきりしているのは、コンスタンティヌスがキリスト教を初めて公認して、テオドシウスの代になるとキリスト教を国教化した。ローマ帝国という国家が民衆にキリスト教を上から押しつけていった。そのことが、それまで存在していたさまざまな神々を押し殺すか、あるいはどこか見えないところに追いやられるかしたんだと思います。イスラーム教も、正統カリフの時代からウマイヤ朝、アッバース朝時代と、大征服によってアラブの大帝国が成立するわけで、征服者たちの宗教がイスラーム教だったわけですから、これもいわば上から降りそそいできたものです。

ただ、キリスト教とイスラーム教に関する大きな違いは、キリスト教には布教という制度がありますが、イスラーム教にはありません。今もわたしの家に性懲りもなくパンフレットを送りつけてくるキリスト教会の人がいますが、キリスト教はある意味でたいへん押しつけがましい。

ところがイスラーム教は、いま中東を中心として世界中に12億か13億のイスラーム教徒がいますが、これは宣教師みたいな人がいて広めていったわけではなく、自然に広まっていったんです。でも、イス



ラーム教にしても大帝国の支配層の宗教ですから、上から下々へ広まっていったことに変わりはありません。そのことによって、ちまたに存在していたさまざまな神々が隠されたり消えていったりしました。

しかし、11世紀ごろになると、イスラーム教が広がっていった地域では、それまでの上から広がっていったイスラーム教に対して、スーフイズム、神秘主義教団などが出てきて、いわば下からの巻き返しのようなことが起こり、各地のいろいろな聖者みたいなものが設定されていった。たとえば、エジプトのカイロからアレキサンドリアに行く途中にあるタンターという町は、神秘主義教団の拠点ですが、調べてみると、そこはイスラーム教が広がる以前はある宗教の聖地だった。

日本の場合でも、高野山なんかはもともと死者を葬る聖地でした。空海はそういうところを見つけて、そこに金剛峯寺を建てた。そういうふうに、大宗教以前に人々のあいだに自ずと存在した聖地を、上から降りかかっていった大宗教がとらえていったりすることもある。

このことに関連した話ですが、ポール・ヴァレリーが、ヘレニズムとヘブライズムを経験したのがヨーロッパだ、と有名な格言めいたことをどこかで書いていますが、わたしは漠然とヘレニズムはギリシア科学思想みたいなもので、ヘブライズムは端的にキリスト教のことだと思っていました。かつてアラブ医学についてなにがしか勉強して書いたことがあります。アラブ医学には、アラビア語でいう「ルーフ（息）」が生き物の生命を一番争うという考え方、一種の生命理論のようなものがありまして、アリストテレスが動物論か何かで同じような意味のことを書いていまして、東地中海の根っこのほうを取り上げてみると、ヘレニズムもヘブライズムも同じものじゃないかと感じたことがありまして、それを書いたんですが、今日はその資料は持ってきていません。

それから、世界史という概念をヨーロッパ人が持ったのは第一次世界大戦後ではないか、という金子さんの最初の質問についてですが、先ほどいいださんがおっしゃいましたが、やはり第一次世界大戦後にヨーロッパが廃墟になったということが大きく影響していると思います。

今日申し上げたモンゴメリ・ウィリアム・ワットさんの『地中海世界のイスラム』（筑摩叢書）という本に、わたしは20~30頁くらい長々と解説を書いております。その中でも言っていますが、シュペングラー以後、ドーソン、サザーン、トインビー、それからアンリ・ピレンヌなどの一種の世界史理論みたいなものがヨーロッパでは出てきます。

ジャネット・アブー・ルゴドさんが『13世紀の世界史』（岩波書店）という本の中で書いていて、非常に実感がありましたが、第二次世界大戦後に日本が廃墟になって、ヨーロッパも廃墟になって、アメリカだけが一人でがっちり儲けたと。それで、アメリカの物質文明が世界中の人間にとって輝いて見えた。そのことが、第二次世界大戦後のアメリカの覇権を存在させた幻想を生んだという論です。

第一次世界大戦のあと、気がついてみるとヨーロッパは廃墟になっていた。わたしは平凡社から出した本『世界史の第二ラウンドは可能か』で、「ヨーロッパが自殺した」と書きました。ヨーロッパ近代文明は自己崩壊したと書いたんですが、それまでは、ヨーロッパ文明の繁栄を疑う者は、ヨーロッパ人の中にはほとんどいませんでした。

エジプトを1880年代に占領して、最初の植民地官僚になったイヴェリン・ベアリング（クローマー卿）は、自著『近代エジプト史』の中で、「文明と言えば、それはヨーロッパである」。ヨーロッパ以外に文明はないんだと言っています。同じことを経済学者のスタンリィ・ジェヴォンズもどこかに書いて

います。産業革命から第一次世界大戦までは、ヨーロッパ自体が世界文明であって、それ以外には文明はないと、非常に奢り高ぶったものの考え方です。それを裏づけるものが、近代ヨーロッパの場合は中世ヨーロッパで、その前はギリシア・ローマで、その前は古代オリエントだと、遡っていく世界史像なんです。

ところが、半年くらいで終わるだろうと思っていた第一次世界大戦が四年間かかって、やっと戦争が終わって気がついてみたら、ヨーロッパ全土が廃墟になっていた。ヨーロッパは自殺したわけです。そこでショックを受けて、初めてヨーロッパの人たちが自分自身を客体化していく。そういう世界史の中から、アンヌ・ピレンヌのようにイスラームの役割を強調する人なんかが出てきて、そこから始まっていくということだと思います。このことは、さっき申し上げたワットの本の解説の中に書いています。

いいだ 三澤昭さんのご質問に対するわたしの答えを、すこし補足させていただきます。ヨーロッパ文明の本質の一つに、「ジェノサイド」という絶滅戦争的思想がある、と言いたいことは、相変わらずなんですが、いまの三木亘さんのお話を伺っていて、単に「戦争様式」だけではなく、「生産様式」にも、近代ヨーロッパの特色があるな、とつくづく思いました。それを付け加える必要がありますね。18世紀の産業革命以降の近代資本制社会における、何て言いますか、「工業化」「産業化」「合理化」社会が持っているもの、われわれの最近の経験から言えば、「フォード・システム」という問題になりますね。このことについては、今日いらしている片桐薫さんがご専門です。

「フォード・システム」の問題というのは、要するに、大量生産・大量廃棄という問題です。わたしたちは、まさにその問題の中で、現在アップアップしているわけですし、それはいわゆる「過剰な豊かさ」の問題だと思います。「過剰な豊かさ」の裏面には、AALAの極度の貧困化という「二極化」の構造的な問題があるわけですし、やはり、ヨーロッパ文明には、「大量虐殺」という戦争様式の問題と、プラス、「大量生産・大量廃棄」という独特の生産様式の特色がある、ということをご理解いただければ、と思います。

もう一つ、ニュートンの力学についてです。みなさんはあまり、ニュートンの本なんて読まないから、中学生の教科書に書いてあることくらいしかご存知ないだろう、と失礼ながらわたしは思いますが、わたしはわたしなりに、ニュートンをよく読んでいますので、驚くべき光景をわたしなりによく心得ております。ニュートンの自己意識そのものに即して、ありのままに見ていくと、ニュートンがやった仕事というのは、キリスト教神学の力学的証明である、と逆に考えた方がいいくらいです。また、わたしは、ニュートンの力学に、単に神学というよりは、「錬金術」と一体化した技術文明を強く感じます。

わたしのこの本の欠陥はいくつかありますが、最大の欠陥の一つは、「錬金術」について総括していないということです。そのことはもともと気がついていたんですが、これ以上は厚くできないこともあって諦めました。あとで別の本にしようと思って、研究しつづけているんですが（笑）。ご期待ください。またまた、とても分厚い本になりますよ（笑）。

バビロニア以来の「錬金術」の問題は、ケミストリー、化学の問題です。これは科学じゃないとは言えないわけですから。「錬金術」で何をつくるかということ、要するに、他の卑金属から貴金属である金をつくる。だから、「錬金術」というのは、大思想から言うと、卑近なものを高級なものへと転化させる〈グノーシス〉の偉大な理想なのです。それが、大航海時代以降の当時の「重金主義」思想と結びつ

いていますから、近代思想でもあるんですけれども、そういう意味でも、やはり、「錬金術」は、バビロニア以来の歴史を背負っているものとしてあるわけですし、「錬金術」については、必ず近く本を千ページくらいごく短く書きますので、ぜひそれをみなさんはお読みください（笑）。

猪野 もう質問にリプライする時間がないので、このへんで終わりにしたいのですが、まだ発言されたい方もいらっしゃるようですので、言いたいことを言って帰るといことにはどうでしょうか。批判でもなんでもかまいませんので、2分くらいをお願いします。

清水邦男 いいだ先生の、西欧文明はジェノサイド（大量虐殺）を引き起こすような性格を本質として持っているのではないかという見方には、わたしも、まったく同感です。欧米人たち自身は、こういう見方を認めたがりません。ヒトラーも西欧文明が生み出したものであることには間違いのないわけですが、ドイツ人だけでなく、欧米人は一般的に「ヒトラーは突然変異の例外的産物であり、西欧文明の本質とは無関係」と考えたがっています。ジェノサイドを引き起こす精神（心理）は欧米の基本的な思考形式である二分論と深く通底していることを認めたくないからだと思います。二分論的思考は、科学を生み、技術を発展させ、強大な経済力と軍事力を発展させ、西欧諸国が世界に覇権的地位を確立することを可能にしてくれた根源的な原動力だからです。欧米人の非欧米人に対する優越意識の基盤でもあるわけですから、それがジェノサイドやヒトラーと通底していると認めることは、欧米人の優越意識、自尊心を根底からゆるがすことになるからだろうと考えています。

先ほどキリスト教と近代科学の相関性についてのお話がありましたが、キリスト教的な善悪の二分論が、近代科学の二分論的思考を生み出したのか、それとも、二分論的思考から善悪二分論にいたったのか、わたしにはわかりませんが、理性的な二分論的思考が西欧の近代科学技術を生み出した根元的な思想であることは間違いありません。対象を二分するという思考は、真実と虚偽という分け方となり、虚偽は否定されなければなりません。これが、現実の人間社会の中では善悪論になり、善人悪人論になり、悪人と断定した以上は悪は潰さなくてはならないと考えてしまう。これがジェノサイドをやむを得ないことと、無意識的に考えてしまうことにつながるのではないかと思います。ジェノサイドと二分論的思考の共通性を認めたくないのは、西欧文明の文化的盲点だと思います。

なぜならば、理性的な二分論的思考が素晴らしい世界史的な科学文明を生み出したという誇りが強いので、どうしても二分論的思考が持つ欠陥（ジェノサイド的断罪）に直面しても、じゃあ、近代科学の二分論的思考を否定するのか、捨てるのか、となると、それは考えられない。ジェノサイドは「例外的な悪人の犯行」ということにして、自ら納得し、目をつぶってしまうのだらうと思います。欧米人としては、二分論的思考が悪意に満ちたものだと考えられません。一方、ジェノサイドは悪意そのものにほかならないから、両者は無関係だと考えたくないのでしょう。

だから、ベトナム戦争で起こしたような同じ間違いをイラクでも引き起こすことになってしまう。しかし、だからと言って、欧米人は、ジェノサイドと通底する"邪悪な者"と決めつけてしまう言い方は、わたしは大きな間違いだと思います。それは、ある男が悪いことをしたから、あいつは悪だと断定するのは、まったく同じ二分論的思考だと思うからです。欧米人は、自らが誇りとする二分論的思考の成功体験がじゃまをして、二分論的思考に内在する欠陥を理解しにくいだけだと思うのです。情緒性（気持

のつながり)を重視する日本人は理性的な二分論的思考を嫌います。一億国民が一つになって、無謀な「先の戦争」に突っ走り、中国などの占領地での虐殺などを引き起こし、やがては敗北した歴史は、日本人が理性的思考、善悪を二分する判断、「対立する精神」を軽蔑し押しつづけてきたことに根源的な理由があるとわたしは考えています。日本の美しい伝統(「和の社会」)が暴走と虐殺も引き起こしたわけです。しかし、日本人は、「和の精神」と「無謀な戦争」が通底しているとは認めたくありません。これが日本人が戦後六十年経っても、いまだに戦争責任問題に決着を着けられない理由だと考えています。欧米の理性がジェノサイドを引き起こすことを認めたくないのと同じ人間性のメカニズムだと言えます。

人間には理性と情緒性という両面があって、両者はえてして矛盾しがちです。人間性の本質は、相反する性質を内蔵する矛盾的存在だという理解が大切だと思います。どちらも自己に内在するものである以上、どちらかを無視したり、押しつづしたりすることは自滅行為です。そこから「文明の衝突」が起きます。それは人間の宿命ではなく、たんにまだ人間が自己の根源的矛盾性を十分に自覚していないこと、したがって、その矛盾性を克服する知恵がないだけだと思います。そこから起きる「文化の死角」、「文明の盲点」だと思います。理性と情緒性だけでなく、男女という異質性の存在も矛盾を引き起こしがちですが、この異質性、矛盾こそ人間にとってのすばらしい発展の、生の原動力です。自らの「文明の盲点」を越えることは、ほとんど不可能だと思えるほど難しいことですが、本質的に人間とは矛盾的存在であると腹をくくって理解すれば、他者、異文明への寛容と理解が生まれてくるし、この盲点を克服していくがいかに人類の未来は無いという覚悟が出来てくると思います。

吉岡秀祐 吉岡です。わたしも今の方の考えにまったく賛成です。ヨーロッパをピレネー以北と以南で二分するというのは、かなり乱暴な議論だと思います。また、キリスト教の一神教としての性格を強調しすぎるのも、ヨーロッパ文明はキリスト教をベースにしていると言い切るのも、乱暴な一般化だと思います。例えばアイルランドですが、ケルトの民間信仰が混ざり込んだアイルランドのキリスト教は、地中海地方のそれとはまるで様相を異にしています。いまその地域色の強いケルト文化、音楽やダンスや冒険物語を中心に全世界的に人気ですが、その魅力は、他の地域ではなかなか味わえないものです。

あるいは、日本を糸魚川で東西に分けてしまうというのも、とても乱暴だと思います。じゃあ、琉球人は西の人ですか？ 北海道のアイヌは東の人ですか？ 政治・行政のはなしだけでなく、彼らも含めての「ニッポン全体」の姿はイメージできないでしょうか？ 東北の文化も、西日本に対する東日本文化の括りでいっしょくたにしてしまっているのかどうか。

なぜ今こういうことを言うかという、次の時代のことを考えるときに、今までの鍵カッコ付きの歴史学のあり方に拘りすぎていると、未来はないとぼくは思うんです。確かに、世界は絶望的な状況にあると思いますし、悲観的な要素で満ち満ちていて、希望なんて持ちがたいと思いますけど、ぼくはやはり希望は捨てたくない。それには世界を少ない色数で乱暴に塗り分けるのではなく、もっと各地域各地域の価値＝カラーを、互いに認め合うことから始めなくてはならない。だとすると、ものを二分して、二項対立的に考える思考法そのものが、反省されなければならない。

地中海の話が出ましたけれども、地中海の人だったら、そんなに悲観的にならないと思います。恋をして、お酒を飲んで、歌って踊ればいいじゃないかと。それはかなり無責任な態度ですが、そういつ

た態度も一つには可能です。地域的・地方的世界の色を life (いのち／くらし／人生) の基本色に置く考えです。世界をそれらの色の混ざり合いとして把握するやり方です。

権力としての大きな文明の対立の歴史というかたちで歴史学を叙述していくことは、それはそれで価値を否定しません。でも棲み分けの理論を識る現代の我々にとって、その方法論は、手塚治虫の漫画のように、あまりに無邪気で素朴で大雑把に映ります。圧倒的な少数派であるところの人類が持っている、文化なり価値なり、生きる意味なりが抱える、もしかすると人類存続のための大きなヒントが、ふっと忘れられてしまうことにもなるんじゃないか。

『ダ・ヴィンチ・コード』がずいぶん持てはやされていますが、あれなんかも、地中海の地域から遙か離れた別地域に住む、無邪気なアメリカ人と日本人ばかりが騒いでいるような感じを持ちます。地中海沿岸の人たちにとっちゃ珍しい話でもありますまい。この作品は漫画やエンターテインメントの類としては充分、アメリカ人も日本人も、生真面目で過剰な反応をしたのかなとも思いました。

田邊好美 今のお話に続きまして、三木先生のプリントの地図に引かれている緯度 40 度の線が、何かおかしいなという気がするんです。 私事ですが、今日は眠くてしかたがない。というのは、朝の 6 時までサッカーの試合を見ていたからなんです。世界 4 強になったのは、ポルトガル、フランス、ドイツ、イタリアでした。これで見ると、40 度の線の南に入っている国はイタリアだけで、あとは北の国なわけです。しかし、そのチームでプレイしている選手は、フランスの場合だと、ジダン。ドイツだと、ヒットラーが抹殺しようとしたユダヤ人はいないけれども、ドイツとは違うところから入ってきた選手がいるし、ポルトガルにもアンゴラ系と思われる選手がいます。いろんな人が混ざっていて、かつ、かれらもそのチームの国歌を歌う。

TV で観戦していて思ったのは、いわゆるヨーロッパの場合、ブロンドで紅毛碧眼ばかりがヨーロッパ人ではない。金髪はイタリアにはほとんどいませんし、スペインは北のほうに少しいるだけです。そればかりではなく、これまでステレオタイプに見てきたヨーロッパと、現在のヨーロッパはかなり違ってきているんじゃないか思うのです。従って北緯 40 度線に意味を持たせるのは意味がなくなっていると存じます。

次に歴史ということについて少し考えを述べます。パトリス・エミリー・ルムンバという名を今回も出してしましますが、かれが暗殺される前に、キンシャサの牢獄で奥さんに書いた長い手紙があるんです。そこにはこういうことが書かれています。「われわれコンゴ人はこれからコンゴの歴史を書こう。これは、ベルギーが書いた歴史でもない。ヨーロッパ人が書いた歴史でもない。ぼくたちが書く歴史なんだ」そして「Vivele Congo! Vive l'Afrique!」と締めて手紙を終えています。

ここで僕が考えるのは、この手紙が書かれた言語はなんだったのかということ。フランス語ですね。そうすると、それは植民地主義者側の言葉ではないかなと考えて、極めて複雑になるわけです。かつ、かれが 1961 年に暗殺されてから、コンゴはいったいどうなったかということ、モブツであり、そのあとのカビラであって、まったく救われない状態が続いています。ルムンバの理想と未来予測は完全に裏切られています。その現実を見ずに、帝国主義が終焉したとか、崩壊寸前であるとかいって見たところで未来への希望を照らすことにもなりません。繰り返しますが、現実世界ではアメリカ帝国主義はもうすぐ終わるといようなことはほとんど考えられない、ということです。グローバリズムの波

はアフリカの最貧国にも影を落としているのです。歴史的にもまた地理的な広がりにおいても米帝国主義が終わる兆しは全く見えません。

時代の認識が甘すぎるということを僕の第二の印象として申し上げたいと思います。

猪野 時間ですので、これで終わりいたします。ちょっと予告をさせていただきます。どうにか3回目を終えました。最終回4回目のパネラーは金子務さんとなだいなださんです。最初に申し上げたことですが、三木先生のお話ではありませんが、わたしは遊びとして科学史会のようなことをやってきましたけれども、1968年にわたしたちは学び方そのものを問われたわけですし、おまえはアカデミックな論文を書かないじゃないかとか、学会で発表しないじゃないかとか、いろいろ批判されました。それにはわれ関せずで、こういうシンポジウムを開くことによって、自分の関心事を皆さんとともに共有して、知的な媒介をさせていくという活動自体に、知的な営みを感じてきています。その矢先に、大思想家のいいださんがギリシアの本を書かれた。これはと思って飛びついたわけです。これだと思ったのは事実です。そこからいろいろ勉強をしていこうと思ひまして、でも独学ではなく、皆さんのお知恵をお借りしながら一緒に勉強していこうというのが、この4回の連続懇談会だったわけです。

本当にわたしは毎回「清水の舞台」から落ちるような気持ちで、先生方にお越しいただきました。今日も三木先生においでいただきました。と申しますのは、一面識もない方もいらっしゃいましたし、三木先生にもおそろおそろ電話を差し上げたんですが、本当にお呼びしてよかったと思います。1回目は片桐薫さんと針生一郎さん、2回目は近藤節也さん、これらの大先輩方が真剣に議論してくださり、非常に感動しておるところです。

パネラーの方から、御著書を送っていただければ、すかさず読まざるを得ないので、たいへん忙しい日々を送っております。次から次に送ってくださるので、たいへんですが、主宰者冥利に尽きます。最後まで初志貫徹で頑張ろうと思います。これは今年1年続くと思いますが、克明な記録をとっておりまして、雑誌『湘南科学史懇話会通信』に特集で掲載する予定です。ご期待、お楽しみください。

もう一つ申し上げておきたいのは、ここは市民の学問所ですので、今日は金子務先生にも合流していただいて一緒にやらせていただきましたが、その金子先生が河出書房新社から出された『アインシュタイン』上・下は、ものすごく面白い本です。アインシュタインが日本に来て、何をして、どんな影響を与えたかを書いた小説です。わたしは金子先生のファンですが、改めてその博識さと明晰さに感動いたしました。

いいださんの世界と金子さんの世界がどうつながるのかなあと思ったときに、以前この「湘南科学史懇話会」で〈星の話〉をやっていたことを思い出しました。「星は五角形か六角形か」という話なんです。それ以来、放送大学その他で長い間教えておられますので、最終回には科学史家の視点から総括的な話をバシッとやっていただけましたら幸いに思います。今日は金子さんにいらしていただいて、この場の様子をわかっていただけたので、本当によかったと思います。次回も楽しみです。最終回は8月6日ですので、皆さん、ぜひ宣伝していただいて、たくさんご参加ください。若い人にもっと来ていただきたいと、そして、いいださんをびっくりさせたいと思っています。(終)